



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 11

2008年9月号



はじめに

ニューズレター本号は4編の論考を掲載しています。

門脇誠二、久米正吾、西秋良宏3氏による「ガーネム・アル・アリ遺跡周辺における先史時代遺跡の踏査：第5次ビシュリ現地調査より」は、本年3月から4月にかけておこなわれた第5次現地調査の一環として実施された先史時代遺跡踏査の成果の概報です。同地の先史時代における居住組織と土地利用のパターンに関する証拠を得ることを目的としたこの踏査は、ガーネム・アル・アリ遺跡を中心とした半径約10キロメートルの範囲のユーフラテス河南岸でおこなわれ、30以上の遺跡を確認しました。本概報ではその興味深い成果が報じられています。

足立拓朗氏の「ヘダージュ1 = ケルン墓群出土の青銅製品」は、第5次現地調査と4月から6月にかけておこなわれた第6次現地調査の一環として発掘調査が実施されたビシュリ山北端ヒダージュ1 = ケルン墓群の年代に関する所見を提起しています。同氏は9号ケルン墓出土の青銅製トル・ピンと10号ケルン墓出土の青銅製腕輪の特徴を述べられ、同ケルン墓群の年代を考察しています。結論として、ヒダージュ1 = ケルン墓群の一部は前2000 前1800年頃に構築された可能性が高いことが述べられています。

前川和也、森若葉の両氏は、「初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルハ」において、初期王朝時代III期、アッカド時代、ウル第3王朝時代における南部メソポタミアと周辺地域との交易の状況を紹介しています。この時期に南部メソポタミアと交易をおこなっていた地方は、シリアやディヤラ河流域以外の地方として、ディルムン（現在のパーレーン）、マガン（現在のオマーン）、メルハ（インダス文明地域）であったことが述べられています。初期王朝時代III期からウル第3王朝時代におけるメソポタミアとディルムン、マガン、メルハとのあいだの物流の様子を知ることは、研究対象となる主要な時代がこの年代枠におさまる本領域研究の推進にとって極めて有益です。

辻村純代氏の「シリア・アパメア遺跡の列柱道路：ローマ都市の街路事例研究」は、本領域研究の計画研究「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」（研究代表者：岡田保良）が2006、2007両年度にヨルダンとシリアで実施した調査に参加した同氏が得た成果の報告です。シリアで最大規模を誇る古代都市アパメア遺跡に関する問題提起に富んでいる論考です。

平成20年9月20日

領域代表者 大沼克彦

目次

木内智康氏を偲ぶ	大沼克彦	1
ガーネム・アル・アリ遺跡周辺における先史時代遺跡の踏査		
第5次ビシュリ現地調査より	門脇誠二 久米正吾 西秋良宏	3
ヘダージュ1 = ケルン墓群出土の青銅製品	足立拓朗	7
初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルハ		
	前川和也 森 若葉	14
シリア・アパメア遺跡の列柱道路	ローマ都市の街路事例研究	辻村純代 24

表紙

A
B | C

A：アパメア遺跡

B：アパメア遺跡・地下排水溝

C：アル・バアス遺跡

木内智康氏を偲ぶ

大沼克彦（国土舘大学イラク古代文化研究所）

特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」領域代表者

9月8日に木内智康氏が逝去されました。この上ない悲しみと、残念な気持ちでいっぱいです。30歳という若さでした。

8月23日、木内氏から私にメールが届きました。逝去される僅か17日前のことです。その内容は、「癌にかかってしまいましたので、10月から11月のシリア調査に参加できなくなりました。まことに申し訳ありません。完治してからまたぜひ現地調査に参加させていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします」というものでした。彼の意志の強さと優しさに満ちたものでした。

本特定領域研究と木内氏とのかかわりは昨年（平成19年）の2月から3月にかけて実施されたシリア現地の第1次調査が最初でした。この調査は本研究・調査許可地域内の遺跡分布調査でしたが、彼は当該地域・時代の遺跡と遺物に関する豊富な知見により、非常に大きな研究推進力となりました。

第2次調査（平成19年5月）においてもまた現地調査の中心的な役割を果たし、第1次調査ののちに発掘遺跡として選択したガーナム・アル・アリ遺跡の全体測量を長谷川敦章氏とともにおこない、優れた遺跡図を作成しました。

平成19年8月の第3次調査では真夏の猛暑の中、ガーナム・アル・アリ遺跡にトレンチ2を設定し、全体層序を確認するための発掘にあたりました。発掘調査の開始という困難な状況のなかで発掘作業全般を取り切り、調査の成功の立て役者となりました。

そして、同年11、12月に実施した第4次調査においてもガーナム・アル・アリ遺跡の発掘を継続して担当し、着実に正確な作業を通して大きな成果をもたらしました。

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程の学生として木内氏が追求していた研究テーマは、北メソポタミア地方中期青銅器時代（約2000～1600B.C.）における都市社会の復興に関するものでした。

その内容の一端を、同氏から教示をうけたまま紹介いたしますと……前期青銅器時代（約3000～2000B.C.）中ごろの北メソポタミアでは都市社会が成立したが、それらは前2300/2200年ごろを境として急速に崩壊した。そして、前2千年紀に入ると再び集落

が増加し、都市社会が復興した。この都市社会復興の要因として考えられているのは、小規模行政管理機構の残存と新たな民族の関与であり、前者に関しては、かつては前期青銅器時代と中期青銅器時代の間には文化的断絶が存在すると考えられていたが、その後の調査事例の増加を背景として、居住が継続する遺跡の存在が明らかになってきており、1960年代以降のダム建設に伴う緊急発掘調査によって調査事例の増したユーフラテス河中流域では都市社会の復興過程が詳細に論じられるようになってきている。後者についてはアモリ人（Amorite）と呼ばれる遊牧系民族が関与した可能性が指摘されている。粘土板文書などの文献資料によって、中期青銅器時代にメソポタミアおよびシリアで大きな領域を持った王国の王たちのほぼ全てがアモリ人であるとされているからである。このような観点から、これまで不明であったハブール河流域からイラク北部にかけた北メソポタミアにおける都市社会復興の状況を明らかにしたいと思う。特に検討すべき課題として、1）この地域での都市復興が北メソポタミアのほかの地域と同じように前期青銅器時代の都市を継承するものであったのかどうかという点、2）大きな役割を果たしたとされるアモリ人の存在を考古学的に検証することが可能であるかという点である……。

このような研究をおこなっていた木内氏は、本領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」を推進するうえでかけがえのない存在でした。同時に彼は、第一線級の西アジア考古学研究者との討論で、相手の考察を十分に理解したうえで自己の考えを簡潔丁寧に表明する、また、積極的な意見交換を通して研究の情報を収集するなど、当該分野における邦人研究の中心的存在となることを、誰からも期待されていました。

木内智康氏は卓越した研究能力にとどまらず、性格の穏やかな、相手を思いやる優しい心の持ち主でもありました。このことは、調査生活をともにしたシリア現地調査に携わった人たちをはじめ、本領域の研究メンバーのすべてが同感するところです。

木内智康氏の逝去に衷心より哀悼の意を捧げ、ご両親と兄上に心からお悔やみ申し上げます。



ガーナム・アル・アリ遺跡の発掘調査の開始を喜ぶ木内智康氏（後列、右から4人目：平成19年8月）



シリア人共同研究者 Ayham Al-Fahry 氏宅における木内智康氏（左から2人目：平成19年8月）

ガーネム・アル・アリ遺跡周辺における先史時代遺跡の踏査 第5次ビシュリ現地調査より

門脇誠二（日本学術振興会特別研究員）

計画研究「西アジア乾燥地帯への食糧生産経済波及プロセスと集団形成」研究協力者

久米正吾（早稲田大学大学院博士課程）

計画研究「西アジア乾燥地帯への食糧生産経済波及プロセスと集団形成」研究協力者

西秋良宏（東京大学総合研究博物館）

計画研究「西アジア乾燥地帯への食糧生産経済波及プロセスと集団形成」研究代表者

ビシュリ地域における第5次調査の一部として、先史時代の遺跡を対象とした踏査を2008年3月22日から4月7日まで行った。踏査地はガーネム・アル・アリ遺跡を中心とした半径約10kmの範囲内で、ユーフラテス河の南岸である。この地域の先史時代における居住組織と土地利用のパターンに関する証拠を得るため、踏査のほとんどを徒歩によって行い、これまでに発見されているテルや墳墓、地上構築物を確認すると共に、開地遺跡や遺物散布地点など、より微細な居住痕跡の記録を行った。確認・発見された30以上の遺跡の場所が図1に示されている。それに加えて、徒歩で探査した経路も表示されている。踏査範囲の具体的な記録を提示することによって、発見された遺跡の分布や密度に関するより正確な評価を行うためである（図1）。記録のためにGPSを使用できないという制約

を補うために、高解像度の衛星画像を事前に用意し、踏査に携帯した。小さなワディの位置が確認できるだけでなく、ごく最近の民家や道路、畑の位置も確認できる。したがって踏査経路を正確に記録するだけでなく、ナビゲーションの手段としても衛星画像が十分に機能した。

今回の踏査で実際に回ることができた範囲は、西端がジョブリという町に位置する現代の墓で、東端はジャズラ周辺である。この範囲の内、ビシュリ台地の北縁に位置するワディに沿って踏査を主に行った。一方、ユーフラテス河の低位段丘は耕作地として開発され地表面が耕作物で覆われており、より高位の段丘も現代の村の居住域に利用されている場合がほとんどである。これらの開発された地域において、地表面に先史時代の居住痕跡を見つけることは困難であった。



図1 ガーネム・アル・アリ遺跡とハマディーン遺跡周辺の踏査範囲を示した衛星画像。

ビシュリ台地北縁のワディは、ユーフラテス河に向かって北方向に注いでいるが、その規模は一般に小さく、長さが数kmを超えることはあまりない。また、ワディの切込みが急で、断面がV字形を呈する場合が多く、テラスが残されている場所が多くない。それに比べて、ガーネム・アリ村とゾル・シャンマル・フォカーニ (Zor Shanmar Foqani) 村のあいだを流れるワディ・ハラール (Wadi Kharar) は20 km以上の長さを持ち、発達した段丘の残りが良い。今回の踏査では、このワディがユーフラテスの低位段丘に注ぎ込む地点から上流に約7kmの辺りまでに渡って、テラス上に残された遺跡を踏査することができた。

以下、今回の踏査によって新たに発見された遺跡の概要を報告する。まず、ワディ・ハラール沿いのテラス上に、旧石器時代と思われる遺物の散布地点が幾つも確認できた。その多くは、支流のワディとの合流地点近くに位置する。特に注目すべきは、ユーフラテス河低位段丘から約4km上流の右岸に存在する泉である (図2)。その水がワディに注ぎ込む両側には、幅広いテラスが発達している (約80m × 50m と約200m × 60m)。テラスは幾つかの異なる高さに分かれ、その上に幾つかの石器集中地点が確認された (16M, 16N,



図2 ワディ・ハラールの支流に位置する泉。ハラールとの合流地点のテラス上に石器が散布していた。



図3 ワディ・ハラールのテラスで採集された打製石器 (続旧石器時代)。左上2点が三日月形細石器。

16O/P, 16Q 地点)。400点ほど採集した石器には、10以上の搔器と幾つかの彫器、約40の石刃・細石刃、そして細石刃石核が含まれる。その技術形態学的特徴に基づいて、後期旧石器時代の後半から続旧石器時代の前半の遺物と考えられる。続旧石器時代の遺物散布地点は、泉から約1km下流の場所にも発見された。やはり、支流のワディとの合流地点に位置し、2つの異なる高さのテラスが認められた。16I 地点は低位のテラスに位置し、そこで三日月形細石器や搔器、石刃・細石刃を含む50点近くの石器が採集された。ナトゥーフ期の遺物と思われる (図3)。一方、高位のテラスからは (16J and 16K) 三日月形細石器が採集されず、その代わりに幾つかの台形細石器と細石刃、石核が採集され、より古い時期の続旧石器の可能性を示す。ワディ・ハラールでは中期旧石器と思われる遺物の散布地点も確認された。これらが発見されたテラスは、続旧石器の遺物が伴うテラスよりも4~6m高く位置している。このように、ワディ・ハラール沿いのテラス上では旧石器時代の居住痕跡が数多く発見された。旧石器時代の狩猟採集民が、水源とそれに伴う動植物資源を利用するために、この地を頻繁に利用したと考えられる。

一方、ビシュリ台地北縁の小さなワディにおける遺跡の密度は格段に低い。ワディの断面がV字状を呈し、安定したテラスが残されていないためと思われる。しかしながら、テル・シャブート (Tell Shabout) の東方、約500mに位置するワディ (Wadi Shabout East) の右岸には、比較的広いテラスが伴っていた (図4)。その上に発見された3つの遺物集中地点は、ほとんど石器で構成され、土器片が数点含まれる (20A, 20B, 20C 地点)。この内、20A 地点が最も広く (100m × 15m)、遺物分布の密度も高い。ワディが屈曲する場所に位置しており、風がある程度遮断され



図4 Wadi Shabout East (Tell Shaboutの東に位置する)。左側のテラス上に前期青銅器時代と思われる打製石器の集中地点が発見された。

る小さな盆地のような場所で、キャンプを設けるのに適した地点である。この地点で採集された100以上の打製石器の殆どは原礫面の付いた剥片で、その幾つかの縁辺に二次加工が見られるのみである。10以上の石核も含まれる。ユーフラテス河段丘の礫層から採集される転礫を原石とし、殆ど石核の成形を行わずに剥片を剥離している。剥片の打面と側面に広く残る原礫面が特徴的であり、旧石器や新石器時代の石器群とは異なる。一方、同じような技術形態の特徴がガーネム・アル・アリ遺跡やハマディーン遺跡採集の打製石器に認められることから、Wadi Shabout Eastの20A地点の石器群は、前期青銅器時代の可能性が考えられる。

ジャズラ (Jezra) はガーネム・アル・アリ遺跡の南東約3kmに位置し、前期青銅器時代と思われる墳墓群が数多く分布する場所として、すでに報告されている (長谷川2007、藤井・足立2007)。またこの地には、イスラム期の砦として報告されている巨大な石造建築が台地の縁に存在する。この建物のすぐ西側に位置するワディを踏査した結果、河口からやや上ったところにテラスが残されているのを確認した。ちょうど、丘陵上の巨大建築物から見下ろせる地点である。テラス



図5 ジャズラ (Jezra) 西側のワディ (Wadi Jezra West)、左岸のテラス上に位置する居住遺跡 (23H)。



図6 ジャズラの居住遺跡 (23H) 採集の土器片。

上には低いテル状の高まりがあり (Area 23H) 土器や打製石器、磨製石器が大量に散布していた (図5)。現段階では人工の堆積がどのくらい存在するのか不明であるが、大量の土器と食料加工具 (石皿と石杵) が伴うことを考慮すると、一時的キャンプよりも恒久的な居住地の可能性が高いと思われる (図6、7)。採集された石器にはカナン石刃が含まれるほか、転礫を用いた剥片剥離の技術がWadi Shabout Eastの20A地点やガーネム・アル・アリ遺跡、ハマディーン遺跡採集の資料と類似する。この点は青銅器時代の可能性を示すが、より詳細な時代特定は土器の分析結果に待たれる。

以上のような居住痕跡に加え、墳墓、特に前期青銅器と思われる墓域がこれまで報告されていなかった地域に分布することを確認した。これまではガーネム・アル・アリ遺跡の近郊 (Tell Shahboutや Jezra) における墓域の分布が報告されていたが、これらより西方に位置する場所にも同様な墳墓が分布する状況を記録した (図8)。新たに確認された墓域はハマディーン遺跡近郊の台地北縁に位置し、ハマディーンの方角に向かって延びる幾つかのワディ沿いに集中する傾向がある (Wadi 'AinやWadi Qutenaなど)。墳墓の多



図7 ジャズラの居住遺跡 (23H) 採集の磨製石器。転礫を利用した石杵が特徴的である (左上2点)。



図8 ハマディーン遺跡を見下ろす台地上に広がる墳墓群 (Wadi 'Ain West、10N地点の近郊)。

くは盗掘されており土器片が散布していたため、それを採集した。墳墓の構造や共伴する土器について、Tell Shahbout 近郊の資料との比較分析が現在進められている。もしこの墓域がハマディーン遺跡と同時代であるとすれば、居住地の近郊に墓域を形成するというパターンが指摘できるかもしれない。この点をさらに示唆するのが、ガーネム・アル・アリ遺跡とハマディーン遺跡のあいだの地域（ワディ・ハラールの東西両隣）において、高密度の墳墓群が見あたらないことである。ガーネム・アル・アリとハマディーンにおける2つの地域共同体が、それぞれの居住地近郊に墓域を形成し、両者の境界がワディ・ハラール付近に相当する可能性が考えられる。

遺跡や墓域以外に、踏査経路上でも遺物の採集を行った。その中には三日月形細石器や黒曜石製の石刃石器など、時代を特定できる「示準遺物」が含まれる。孤立して発見されたこれらの遺物は、再堆積を繰り返した結果と考えられ、遺跡として登録することはできない。しかし、その近くに存在するかもしれない遺跡の可能性を示すとともに、より巨視的なレベルで土地利用のパターンに関する情報をもたらすことができる。

このように、徒歩による集約的踏査を行った結果、ガーネム・アル・アリ遺跡周辺の限られた範囲内でも

数多くの先史時代の居住痕跡が残されていることが確認された。今後は採集された遺物の分析を進め、発見された遺跡の時代をより詳しく同定することを目指す。それに加え、同地域における踏査を継続することも予定している。それによって新たな遺跡の発見を目指すと共に、今回発見された遺跡の幾つかに関するより詳細なデータ（周辺の地形や遺物密度）を得るためである。これらの調査を通して、ガーネム・アル・アリ遺跡周辺における先史時代の居住組織や土地利用パターンに関する具体的な証拠を提出し、さらにその通時的な変化を分析したい。通時的な比較を通して、ガーネム・アル・アリ遺跡が居住された前期青銅器時代のビシュリ地域における人々の生活や社会の特徴が明らかになることが望まれる。

参考文献

長谷川敦章

2007「ジャバル・ビシュリ周辺における遺跡分布とその立地の歴史的背景 第一次調査成果を中心に」
『セム系部族社会の形成 Newsletter』No. 6

藤井純夫、足立拓朗

2007「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」
『セム系部族社会の形成 Newsletter』No. 7

ヘダージュ 1 = ケルン墓群出土の青銅製品

足立拓朗 (中近東文化センター附属博物館研究員)

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」連携研究者

はじめに

シリア・アラブ共和国のほぼ中央部に位置するビシュリ山系は、西アジアの古代史に多大な影響を与えたアムル(アモリ)人の原郷と考えられてきた。しかし、その歴史的重要性に比べると、この地域での考古学研究は進展しているとは言い難かった。文部科学省研究補助金「特定領域研究」により、2005年度から開始された「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」は、このビシュリ山系で興隆したセム系部族、アムル人の考古学的痕跡を解明することを目標の一つとしている。本稿の目的は、ビシュリ山系で調査中のヒダージュ 1 = ケルン墓群

(Rujum Hedaja 1 Cairn Field) から出土した青銅製品の年代について検討し、本ケルン墓群の年代・特徴について現段階での所見を述べることである。

ヒダージュ 1 = ケルン墓群の調査

ビシュリ山系での調査は、2005年12月に行われた事前視察(常木 2006) 2007年2月の予備調査(藤井 2007)を経て、同年5月18日~6月1日に本格的な踏査が成された(藤井・足立 2007)。この時に確認されたのが、バイル・ラフーム村東部の丘陵地帯に位置する複数のケルン墓群である(図1)。中でも、14基のケルン墓を擁するヘダージュ 1 = ケルン墓群が注目

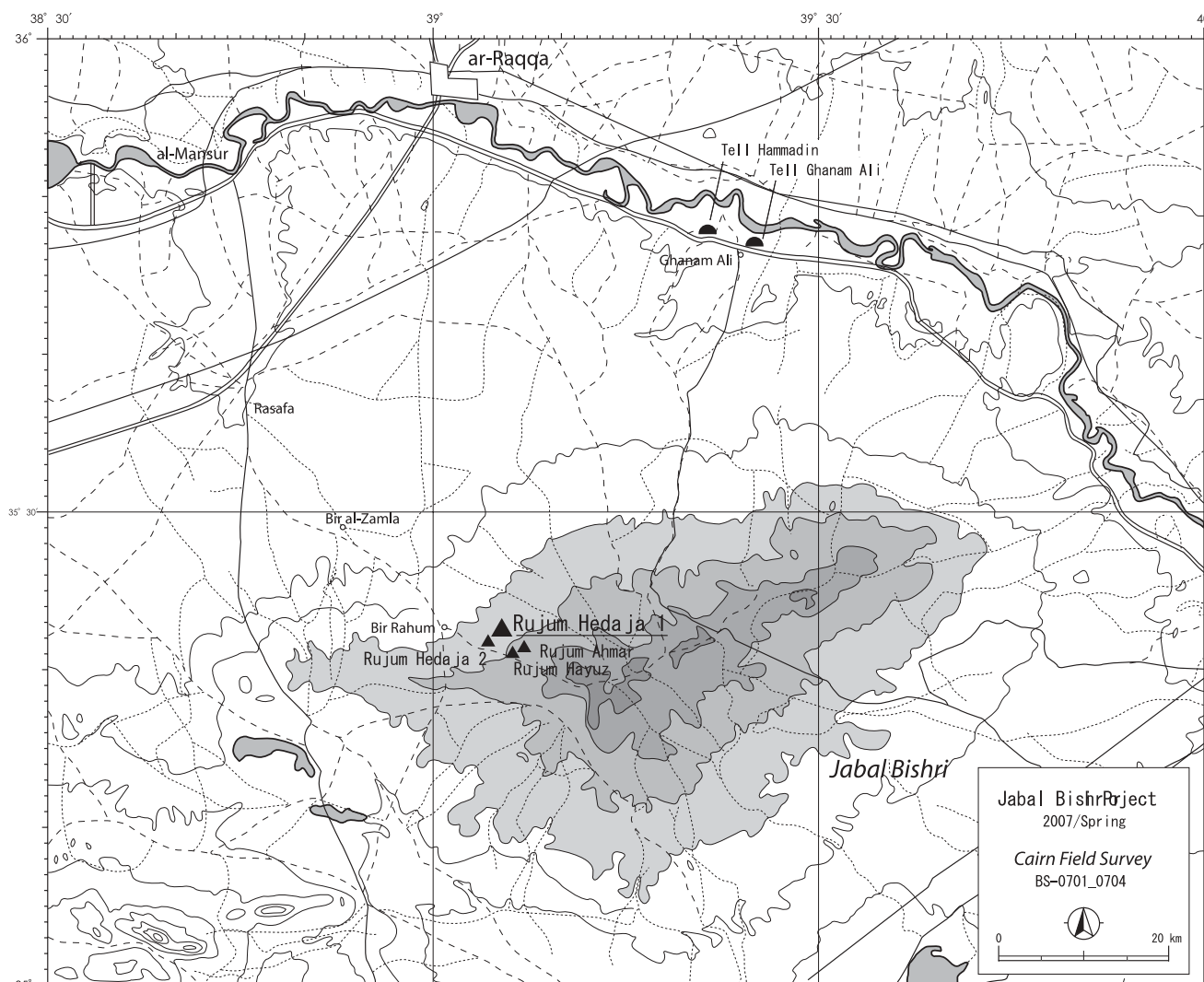


図1 ビシュリ山系北麓のケルン墓群(データ計測済みのもので示した)

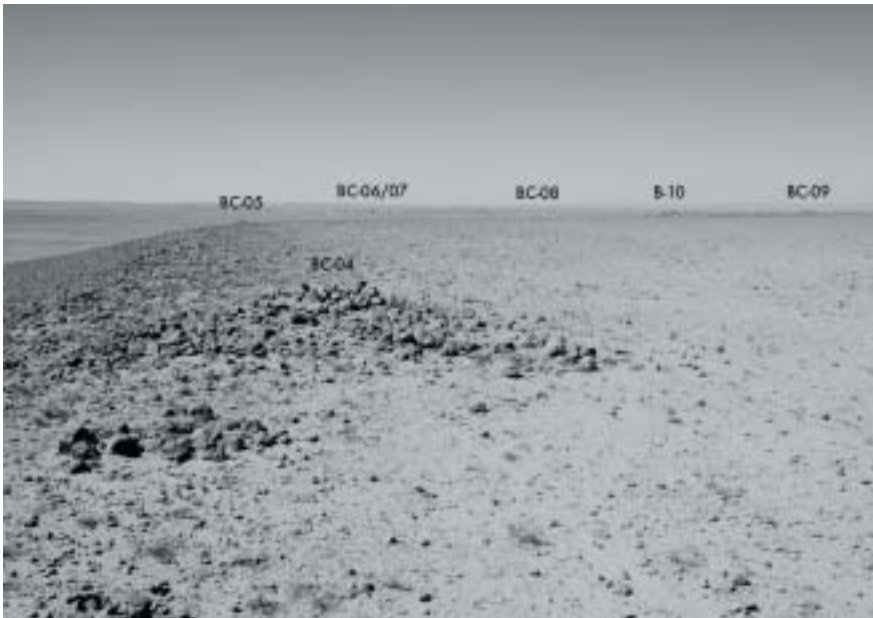


図2 ヘダージュ1 = ケルン墓群（東から）：正面遠方はピイル・ラフォーム村



図3 10号ケルン墓シスト部分：北西から

された（図2）。本墓群で最大の10号ケルン墓は直径約15mに達する大型ケルンである。このケルン墓の縁辺には精巧に加工された美しい石灰岩ブロックが整然と積み重ねられているのが確認され、特別なケルン墓であることが期待された。また10号ケルン墓の周囲には長さ約75mに及ぶ石壁遺構を初めとする様々な遺構が検出され、ケルン墓に伴う付属施設であると推測された（藤井・足立 2007：3）。殆ど考古学的調査が行われていなかったビシュリ山系で数多くの遺跡が発見されたことは極めて有意義である。またゴラン高原やヨルダンのジャフル盆地の調査例からケルン墓群は前期青銅器時代頃に年代づけられる可能性が高く、ビシュリ山系のケルン墓群がアムル人の遺構である期待が高まった。

2008年3月3日～22日の調査で、10号ケルン墓が発掘調査された（藤井・足立 2008）。その結果、二重の周壁に囲まれたシストとその内部に構築された十字形の石組みが検出された（図3）。このケルン墓から

は、土器片、青銅製品、貝製品、石製品、打製石器などが出土した（藤井・足立 2008：図5）。なお、ヘダージュ1 = ケルン墓群の調査は引き続き2008年5月15日～6月8日にも実施され、1～9号ケルン墓が一括して発掘された。従って、同ケルン墓群の発掘総件数は10件である。ただし、遺物を出土したケルン墓は半数にも満たない。本稿では、9号ケルン墓出土の青銅製トグル・ピンと10号ケルン墓出土の青銅製腕輪の2点に着目して、その年代を検討する。2例とも原位置で出土しており、保存状態も良いため、他の資料との比較が可能な資料である。

9号ケルン墓出土の青銅製トグル・ピン

まず、9号ケルン墓シスト内から出土したトグル・ピンについて検討する。これまでのヘダージュ1 = ケルン墓群の調査の中で、最も明確に年代を特定することができる遺物である。このトグル・ピンは、円盤形の頭部を持つのが最大の特徴である。円盤部の径は9.0cm、ピンの断面形は基部近くでは円形、尖端部分に向かって楕円形を呈する。基部から約2cmで若干幅広になり、細い孔が設けられている。尖端部は湾曲し、欠損する。残存長は約6.4cmである（図4：1）。

本資料に極めて類似する資料が、チャガル・バザル（Chagar Bazar）遺跡のI層で青銅製闘斧とともにG200墓壙から出土している（図4：2）。この墓壙はM.E.L.マロワン（Mallowan）により調査され、前1700～前1600年に年代づけられた（Mallowan 1947）。その後、青銅製闘斧の研究のため、この墓壙の遺物はJ.E.カーティス（Curtis）によって注目された。彼は、チャガル・バザル遺跡出土資料を円盤形頭部付トグル・ピン（toggle-pin with disc-shaped head）と名付け、このようなトグル・ピンは、シリア・パレスティナ地方の前期青銅器時代IV期のドーム形頭部付トグル・ピンが変化した型式であり、前2000年に若干遅れる年代に属すると考えた（Curtis 1983）。またG200墓壙の年代は、前18世紀より新しくなることはないと言え、マロワンよりも遡る時代、前2000～前1800年頃とした。また、彼は孔が設けられていない円盤形頭部付トグル・ピンも存在し、このタイプはさらに時代が下ることを示唆した。

円盤形頭部付トグル・ピンは、ミシオルフェ遺跡（図4：3）、ビプロス遺跡（図4：4）、ブラク遺跡

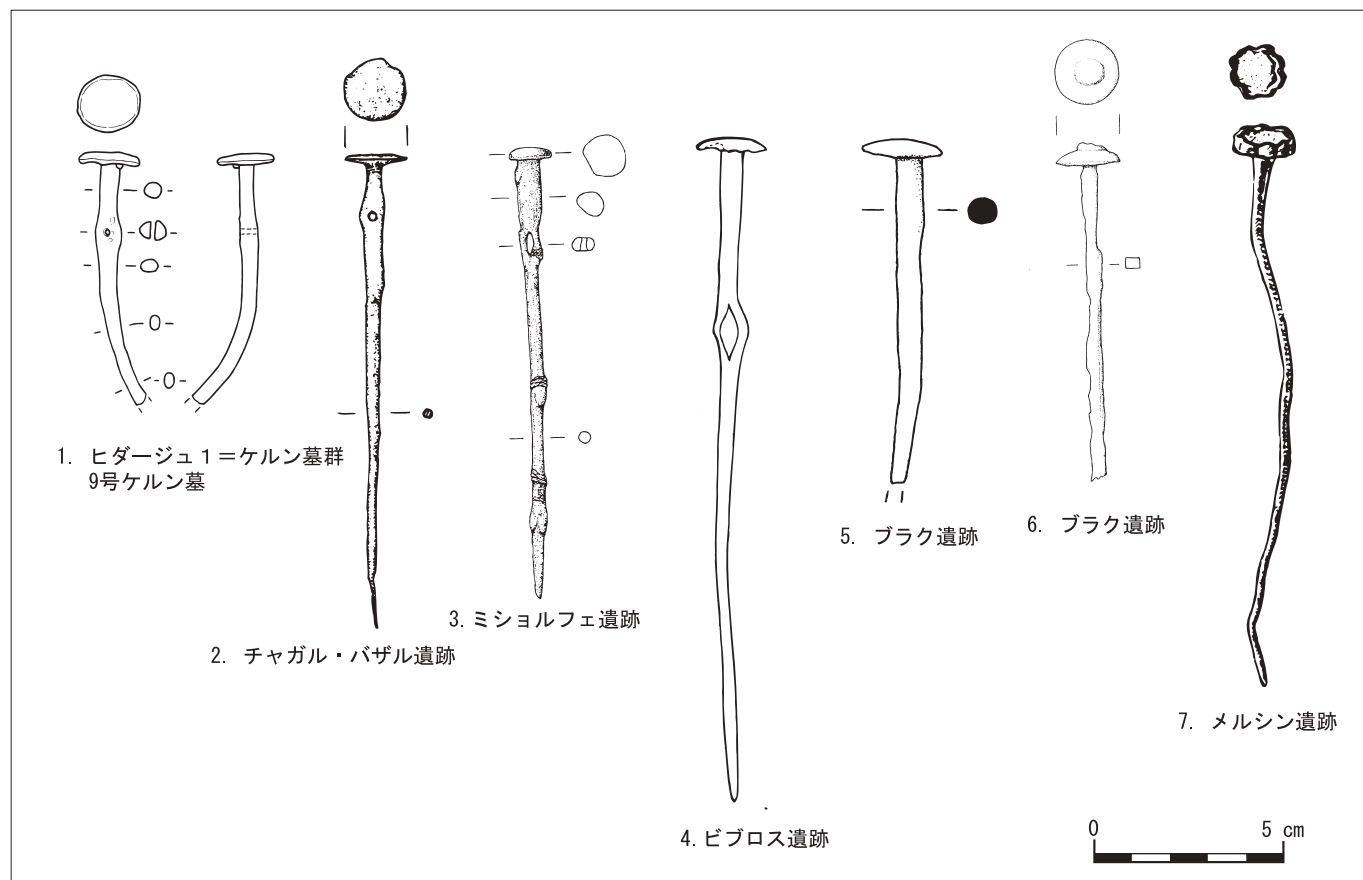


図4 円盤形頭部付トグル・ピン 1: Rujum Hedaja 1 Cairn Field, BC-9, 2: Curtis 1983: Fig.1; 3: Novák et al 2002: Abb. 21; 4: Tufneli and Ward 1966: Fig.10.42; 5: Oates et al. 2001: p.577: 101; 6: Oates et al. 1997: p.267: 24; Garstang 1953: Fig.149.12

(図4: 5, 6)、メルシン遺跡(図4: 7)でも出土している。ピブロス遺跡出土資料は前1750年頃(Tufneli and Ward 1966)に年代づけられている。ブラク遺跡資料はピンに孔が存在しないタイプである。図4: 5はアッカド期(前2300~前2100年頃)、図4: 6は後期青銅器時代(前1550~前1275年頃)に位置づけられている(Oates 1997, 2001)。メルシン遺跡出土資料も、ピンに孔が設けられていないタイプであり、前2000~前1750年頃に属する(Garstang 1953)。

カーティスが指摘したように、孔のない円盤形頭部付トグル・ピンは後期青銅器時代まで下の類例が存在する。しかし、孔が設けられる円盤形頭部付トグル・ピンは前2千年紀前半に集中している。特にチャガル・バザル遺跡出土資料と9号ケルン墓出土資料は極めて類似しており、同時代の遺物であると考えられよう。他の資料からも検討していかなければならないが、現段階で円盤形頭部付トグル・ピンの検討から、9号ケルン墓の年代は前2000~前1800年頃と考えられる。

10号ケルン墓出土の青銅製腕輪

10号ケルン墓は9号ケルン墓より大型であり、シス

トは二重の周壁で囲まれていた。シストと内側周壁の間は、内側回廊となっている。この場所から陪葬墓が2基発見された(藤井・足立 2008)。そのうちシストの東側外壁に接して検出された陪葬墓Bは不整形の石敷遺構であり、人骨は石敷面の最上層からまとめて検出された。この陪葬墓Bの直上には、立石がシスト東外壁に接するように検出されていた。

この石敷面の直上で1点の青銅製腕輪が出土している(図5: 1)。平面形はほぼ円形であり、外径約6.1-5.4 cm、断面形は円形で、その径は約0.4 cmである。端部はやや膨らみを持ちながら丸く収まり、やや上下にずれながら接している。端部近くに刻みが巡っているのが特徴である。この刻みは摩耗しているが、側面からは明瞭に観察することができる。

10号ケルン墓出土資料のように端部を有する腕輪(つまり切れている腕輪)は、端部付腕輪(hoop with open ends)あるいは準環状(penannular)腕輪と呼ばれている。通常、このタイプの腕輪は端部が動物の形状を呈する前1千年紀のものが注目されてきた。本資料のようなシンプルなもの年代が遡り、前2千年紀から類例が見られるが、集中的な研究は行われていない。しかしながら、P. R. S. モレイ(Moorey)は、

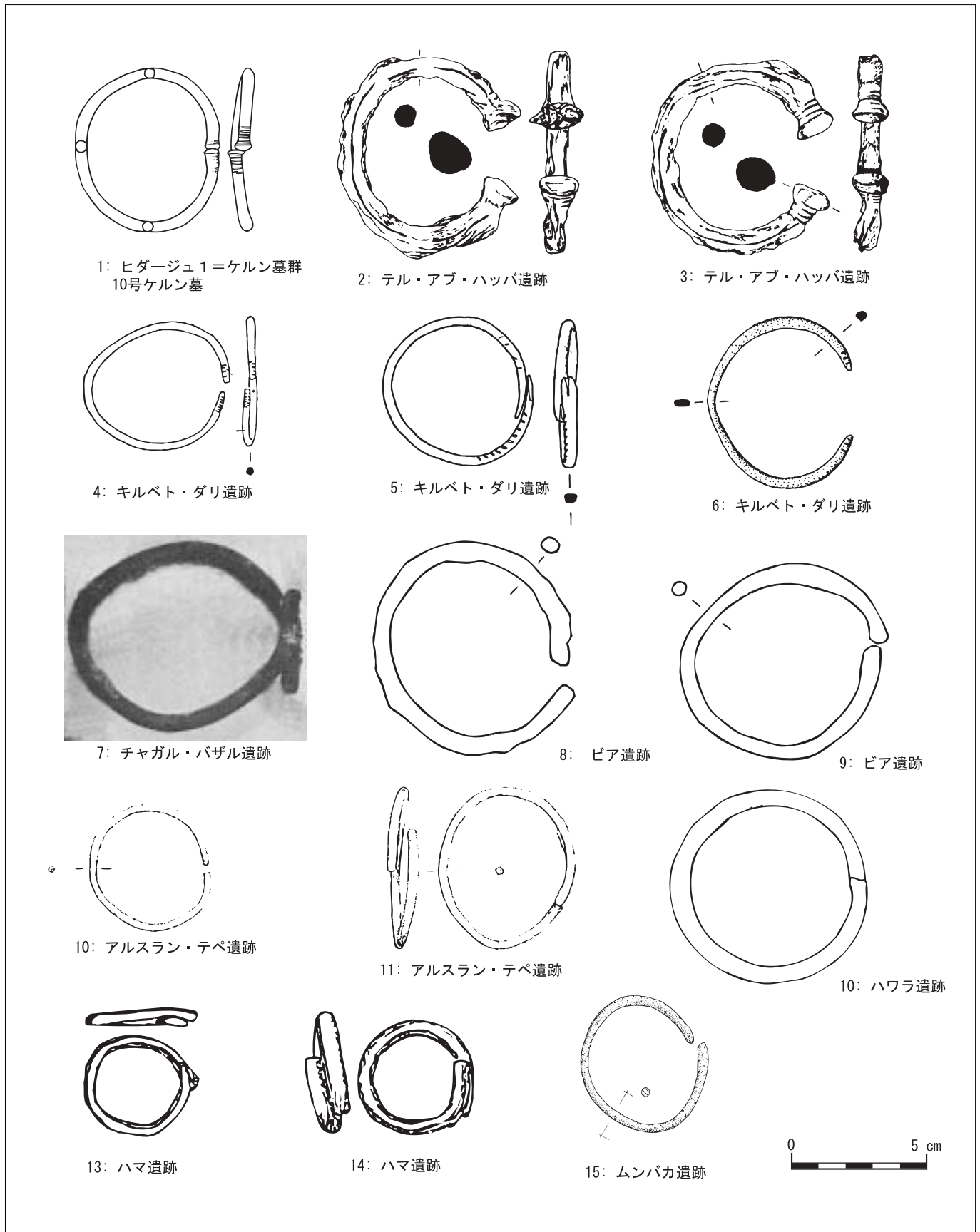


図5 端部付腕輪 1: Rujum Hedaja 1 Cairn Field, BC-10, 2, 3: Fadhil and al-Samarraee 2005: Taf.17.2848; 4-6: Lenoble et al. 2001: Fig.17.4, Fig. 22. 2, Fig. 25. 5; 7: Mallowan 1947: Pl. XXXV; 8, 9: Strommenger and Kohlmeyer 1998: Tafel 49; 10, 11: Frangipane 1998: Fig.9; 12: Orthmann 1981: Taf. 70; 13: Czichon and Werner 1998: Taf.106. 13.

単純な端部付腕輪から端部が蛇頭状を呈するものに変化し、その後各種の動物頭部や前駆が端部の装飾になったという重要な示唆を残している (Moorey 1971 : 218-221)。

10号ケルン墓出土資料と最も類似する資料は、テル・アブ・ハッパ遺跡 (古代名シッパル) の新バビロニア期あるいはアケメネス朝期とされる14号墓出土の青銅製「脚輪」である (図5 : 2, 3) (Fadhil and al-Samarraee 2005 : 174)。その法量は、10号ケルン墓出土資料より一回り以上大きい。腕輪ではなく脚輪として報告されている。大きさの違いはあるものの、端部の丸みを帯びた膨らみや刻み装飾の位置は、10号ケルン墓出土資料に類似している。しかしながら、その端部はかなり開いており、形態が完全に一致するというわけではない。ただ、最も類似する資料が前1千年紀の半ば頃であることを念頭に置いておかなければならない。

端部に膨らみを持つ類例は発見できなかったが、端部周辺に刻み装飾を有する類例は、南ヨルダンのキルベト・ダリ (Khirbet Dharih) 遺跡から出土している (図4 : 4-6)。この遺跡は、ナバテア期～ピザンツ期の墓地遺跡であるが、時代の遡る複数の石棺墓も検出されている。報告者は石棺墓の所属時期については言及を避けているが (Lenoble et al. 2001 : 89)、石棺の構造から考えて遅くとも前1千年紀前半に遡ることは間違いない。端部に膨らみや丸みを持つものはないが、蛇頭状を呈するものは存在する (図4 : 5)。このような蛇頭状端部は、モレイの述べる単純な端部から動物頭部への過渡期的資料と言えよう。そのように考えると、キルベト・ダリ遺跡の石棺墓群の年代は前2千年紀末から前1千年紀初と想定できるかもしれない。

他に端部に刻みが観察できる資料としてチャガル・バザル (Chagar Bazar) 遺跡出土資料が存在するが、写真しか図示されておらず (図5 : 7)、分析するのが困難である (Mallowan 1947 : Pl. XXXV)。端部は大きく重複しており、10号ケルン墓資料とは異なる。

これまでに端部の形状や刻み装飾を中心に10号ケルン墓資料の類似資料について検討してきたが、その形状が完全に一致する資料の渉猟には至っていない。テル・アブ・ハッパ遺跡やキルベト・ダリ遺跡資料は類似しているが、それぞれ南メソポタミアと南パレスティナに位置する遺跡であり、北シリアに位置するヒダージュ1 = ケルン墓群の出土遺物と比較するには距離が離れすぎている。チャガル・バザル遺跡は比較するためには地理的に良好な遺跡であるが、提示された

写真資料ではこれ以上の分析は困難である。

次に、北シリアにおける青銅器時代の青銅製腕輪の出土例を検討していく。まず、テル・ピア (Tell Bi'a) 遺跡の前期青銅器時代 (テル・ピアの時期区分では11期中の6期) の25/48:5号墓出土の2点 (図5 : 8, 9) (Strommenger and Kohlmeyer 1998 : Tafel 49) が挙げられる。端部に膨らみはないが、やや丸みを帯び、端部が近接する類例である。刻み装飾は見られない。

同じく前期青銅器時代には、アルスラン・テペ (Arslan Tepe) 遺跡の墓出土資料がある (図5 : 10, 11) (Frangipane 1998 : Fig.9)。刻み装飾や端部の膨らみはなく、単純な端部付腕輪である。ハラウ遺跡のW066号墓で出土している端部付腕輪は前期青銅器時代末期に位置づけられる (図5 : 12) (Orthmann 1981 : 57)。これも単純な端部付腕輪である。

中期青銅器時代に入るとハマ (Hama) 遺跡J1層で端部付腕輪が出土している (図5 : 13, 14) (Fugmann 1958 : Fig.103)。やや小型、太めの資料であるが、刻み装飾はなく、端部に丸みもない単純な端部付腕輪である。後期青銅器時代には、テル・ムンバカ (Tell Munbaqa) で出土例がある (図5 : 15) (Czichon and Werner 1998)。これも単純な端部付腕輪である。

青銅器時代の腕輪の殆どは単純な端部付腕輪である。何の装飾も施されず、端部は離れることも、重複することもある。10号ケルン墓出土資料のような刻み装飾や丸み・膨らみを持つ端部は青銅器時代の端部付腕輪には確認できない。明確に刻み装飾が確認されるのは、モレイが動物形端部の最初期タイプとした蛇頭状端部の腕輪である (図5 : 5)。刻み装飾は端部が動物形化する初期段階に現れていると想定できる。以上のことから、10号ケルン墓の内側回廊陪葬B出土の端部付腕輪の年代は、前2千年紀末から前1千年紀半以降と考えておきたい。

ヒダージュ1 = ケルン墓群、9、10号ケルン墓の年代に関する考察

10号ケルン墓の年代を考える上で、付帯遺構の第5号遺構が非常に重要である。この第5号遺構からは単打面のフリント石刃石核、タビュラー・スクレイパーが出土している (藤井・足立 2008 : 図5 : 8, 10)。10号ケルン墓でもフリント製の石刃が出土しており (藤井・足立 2008 : 図5 : 9)、10号ケルン墓と第5号遺構がフリント製の石刃、石核、石器を持つ遺構であることがわかる。両遺構から同質のバフ系精製土器片も出

土しており、両遺構が同時期に構築されていた可能性を示すと共に、このような特徴を有する遺構の年代は前期青銅器時代の可能性が高いと予想していた。

しかしながら、10号ケルン墓内側回廊の陪葬墓Bから出土した青銅製腕輪は、現段階では前期青銅器時代に属すると考えられない。従って、10号ケルン墓の年代については慎重にならざるをえない。しかしながら、近隣の9号ケルン墓では前2000～前1800年頃のトグル・ピンが出土しており、前述のフリント製石器類の出土事実からも青銅器時代に遡る可能性は十分にある。

陪葬墓Bは、不整石敷面を持つ遺構であり、シスト内の十字形石棺とは全く異なる構造である。人骨は石敷面に到達する以前の上層からすでに検出されており、また付属すると推定される立石はシスト東壁に接してはいたが、組み込まれていたわけではなく、同時代に構築されたとするには不自然であった。このことから、陪葬墓Bとした遺構は、同時期の陪葬墓でなく後代の追葬墓の可能性もある。ビシュリ山系北麓のケルン墓群はいずれも、見晴らしのよい場所に立地しており、古くから遊牧民の道標として、また聖地として利用されてきたと考えられる。青銅器時代に構築されたケルン墓群を訪れた後代の人々が、この地で追葬を行ったと考えられよう。

本稿の結論は以下の2点である。

1. ヒダージュ1 = ケルン墓群の一部は、前2000～前1800年頃に構築された。
2. ヒダージュ1 = ケルン墓群のケルン墓には陪葬墓らしき遺構が存在するが、これらには追葬墓が含まれる可能性がある。

ヒダージュ1 = ケルン墓群の年代を解明すると共に、ビシュリ山系北麓に無数に存在するケルン墓群の性格・年代を明らかにするためには、さらに複数のケルン墓の発掘調査を展開する必要がある。ケルン墓相互の相対編年を考察すると共に、さらに明確な年代の指標となる遺物を分析し、研究を進展させていかなければならない。

本稿は、筆者個人の考察であり、将来の調査隊の正式見解とは異なる可能性があることを明記しておく。

謝辞：本稿の執筆に際して、木内智康氏から有益な示唆を受けた。感謝申し上げます。

引用・参考文献

常木晃 2006「考古学フィールドとしてのジャバル・ビシュリ」『Newsletter「セム系部族社会の形

成』No.7 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」No.3 1-8頁。

藤井純夫 2007「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究：平成18年度研究報告」『セム系部族社会の形成 平成18年度研究報告』文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」30-34頁。

藤井純夫・足立拓朗 2007「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」『Newsletter「セム系部族社会の形成』No.7 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」1-5頁。

藤井純夫・足立拓朗 2008「ビシュリ山系北麓ケルン墓群の年代と考古学的意義」『日本西アジア考古学会第13回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会 53-58頁。

Carriere, les pp. B. and Barrois, A. 1927 Fouilles de l'ecole archéologique française de jerusalem: effectuées a neirab du 24 Septembre au 5 Novembre 1926, *Syria* 8: 27-213.

Cooprer, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*, New York and London, Routledge.

Czichon, R.M. and P.Werner 1998 *Tall Munbaqa- Ekalte I: die Bronzezeitlichen Kleinfunde*, Saarbrücken, Saarrücker Druckerei und Verlag.

Dunand, M. 1937-9 *Fouilles de Bybros I, text and plate*, Paris.

Fadhil, A. and Z. R. A. al-Samarraee 2005 Ausgrabungen in Sippar (Tell Abu Habbah): Vorbericht über die Grabungsergebnisse der 24. Kampagne 2002. *Baghdader Mitteilungen* 36: 157-224.

Frangipane, M. 1998 Arslantepe 1966: the Findings of an E.B.I "Royal Tomb", *XIX. Kazi Sonuçları Toplantısı I*, 291-309.

Fugmann, E. 1958 *Hama: fouilles et recherches de la fondation Carlsberg, 1931- 1938, l'architecture des pré-hellénistiques*, Kobenhavn, Nationalmuseet.

Garstang, J. 1953 *Prehistoric Merisin*, Oxford.

Klemgel-Brandt, E., S. Kulemann-Ossen, L. Martin and R.B. Wartke 1997 Vorläufiger Bericht über die Ausgrabungen des vorderasiatischen Museums der kampagnen 1995 und 1996, *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 129: 39-87.

Lenoble, P., Z. al-Muheisen and F. Villeneuve 2001 Fouilles de

- Khirbet edh-Dharih (Jordanie) , I: Le cimetière au sud du Wadi Sharheh, *Syria* 78: 89-151.
- Mallowan, M. E. L. 1947 Excavations at Brak and Chagar Bazar, *Iraq* 9: 1-266.
- Mathews, R. J., W. Mathews and H. McDonald 1994 Excavations at Tell Brak, 1994, *Iraq* 56: 177-194.
- Moorey, P. R. S. 1971 *Catalogue of the Ancient Persian Bronzes in the Ashmolean Museum*, Oxford, Clarendon Press.
- Montet, P. 1928-9 Bybros et l'Égypte, text and plates, Paris.
- Novák, M. and P. Pfälzner 2002 Ausgrabungen in Tall Misrife-Qatna 2001 Vorbericht der deutschen Komponente des internationalen Kooperationsprojektes, *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 134: 207-246.
- Oates, D., J. Oates, and H. McDonald 1997 *Excavations at Tell Brak, Vol. 1: The Mitanni and Old Babylonian periods*. Oxford, British School of Archaeology in Iraq, Oxbow Books.
- Oates, D., J. Oates, and H. McDonald 2001 *Excavations at Tell Brak, Vol. 2: Nagar in the third millennium BC*. Oxford, British School of Archaeology in Iraq, Oxbow Books.
- Orthmann, W. 1981 *Halawa 1977 bis 1979: Vorläufiger Bericht über die 1. bis 3. Grabungskampagne*, Bonn, Rudolf Habelt Verlag GmbH.
- Parrot, A. 1964 Les fouilles de Mari: treizième campagne (printemps 1963), *Syria* 41: 3-20.
- Strommenger, E. und K. Kohlmeyer 1998 *Tall Bi'a/Tuttul I: die Altorientalischen Bestattungen*, Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Tufneli, O and W.A. Ward 1966 Relationship Between Bybros, Egypt and Mesopotamia at the End of the Third Millennium B.C.: A Study of the Montet Jar, *Syria* 43: 165-241.

初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルハ

前川和也 (国士舘大学 21 世紀アジア学部)

計画研究「シムール文字文明」の成立と展開」研究代表者

森 若葉 (総合地球環境学研究所)

計画研究「シムール文字文明」の成立と展開」連携研究者

南部メソポタミアでは、鉱物はほとんど産出されず、利用できる木材もすくない。これらは南部メソポタミア外の地域から輸入されていた。前3千年紀後半から2千年紀前半までの時期にかんしていえば、南部メソポタミアとの交易に参加した地方として楔形文字文献にしばしばあらわれるのは、シリアやディヤラ河流域地域などをのぞけば、ディルムン、マガン、メルハである。この時期に書かれたテキストでは、これらがそれぞれ、パーレーン、オマーン、そしてインダス文明の地域を指していることについては、いまは研究者の見解がほぼ一致している。のちにも触れるように、マガンがアラビア半島側のオマーンだけでなくホルムズ海峡をへだてた対岸、すなわちイラン海岸部をも含んでいるのではないかという問題が、未解決のままのこされているだけである。メソポタミアは、ペルシア湾をつうじて、これらの地域と交易していた。近年これらの地域での考古学調査・発掘が進むとともに、メソポタミアと東方諸地域のあいだの海上交易についての文献研究も深化しているから、ここで、時代ごとにメソポタミアとディルムン、マガン、メルハとのかかわりを概観しておくのも無駄なことではなからう。

I. 初期王朝時代 III 期

私たちが知りうるかぎり、この時期のメソポタミア楔形文字文献にはディルムンのみが言及される。マガンやメルハはあらわれない。じっさい当時、ディルムンは、シムールの人々が海路で物産を輸入するさいの唯一の中継地であつたらしい。人々は船でディルムンまで出向き、そこでさらに遠方から(たとえばメルハやマガンから)到来していた商人たちと交易交渉をおこなっていたのであろう。なおこの時代やそれ以降に書かれた楔形文字テキストで「ディルムン船」がしばしば言及されるが、おおくのばあい、この語は「ディルムン人の船」の意味ではなく、ディルムンまでの航海に耐えられるように、南部メソポタミアで建造された船を指している。前24世紀中葉のラガシュでは、

人々はしばしば「ディルムン船」の形状をした青銅容器を神殿に奉納していた(1)。

この時期のラガシュ王朝の創始者ウル・ナンシエは、ディルムンから船で木材をラガシュまで運んだとくりかえし語っている(2)。また王朝の末期に記された行政記録には、「商人(dam-gar₃)」が王室のためにディルムンの銅を輸入したとある(3)。いうまでもなくディルムン(パーレーン)は銅の産出地ではない。銅はマガン(オマーン)から、あるいはさらに遠方からディルムンに送られてきていたにちがいない。「ディルムンのシェケル(gin₂-dilmun)」という表現は、その頃南部メソポタミアで成立した語彙リストにあらわれるだけでなく、はるか西方シリアの都市国家エブラの行政文書にも頻出する(4)。当時すでに、メソポタミア・シリア世界の交易では金属にかんして共通の度量衡が使用されており、それにディルムンという語が冠せられていたのである。

初期王朝時代の南部メソポタミア人は、ディルムン以南については、ほとんどなにも知らなかったかもしれない。ラガシュ文書とほとんど同じ時期にエブラで書かれた文学テキストでシュブル(北メソポタミア)、シムールとならんでディルムンが言及されていて、このシュブルとディルムンが、それぞれシムールの北、南を指していると思われるからである(5)。

ただし、前24世紀に南部メソポタミアとディルムンの交易を担ったのは、「商人」だけではなかったことに注意しておかなければならない。のちにくわしく述べるように、ウル第3王朝時代(前21世紀)では、gaeš(GA.KASKAL)とよばれる官職者が公的な海外交易の最高責任者であった。そして、初期王朝期後半に成立した語彙リストにもgaeš官職があらわれるし(ED Lu E 83)、またラガシュ文書のなかに、「エラムの船」で交易された物産をgaeš₂(KASKAL.GA)が王宮に運びこんだ記述や、彼がディルムン交易を差配していたことを示す記録がある(6)。いっぽう、すくなくともアッカド時代やウル第3王朝時代には、「商人」

のおおくは、出資者から集めた銀をもとでの一部として、ときには王権とはかなり独立した交易活動をおこなっていたふしがある。

II. アッカド時代

アッカド王朝時代にはいと、状況は一変する。文書にはディルムンだけでなく、マガンとメルハも言及されるようになる。王朝の創始者サルゴンは、ディルムン、マガン、メルハの船が首都アガデの港にまで繫留されたことを誇っている(7)。この時代には、たしかにメルハからの船が南部メソポタミアまで来たこともあった。メルハ人(船員)に食料を与えている記録がのこっているからである(8)。メルハ語通訳がいたこともわかっている(9)。ただ行政文書には、メルハからなにが輸入されたかは明記されていない。これにたいして、マガンからは銅、紅玉髓(gug₂)、šuba₃石、青銅製品などがもたらされた。また、ディルムンとの交流もつづいていた。港湾で「ディルムン船」のために働いた労働者についての記録がのこっている(10)。そして、この時期にメソポタミアと東方との交流がさかんであったことをもっとも雄弁に語っているのは、インダス文明地域からもたらされた印章や、メソポタミア円筒印章といった工芸品の意匠である。後者には、東方にしか棲息していない珍奇な動物が描かれているからである(11)。

アッカド時代にイランやはるか東方インダスの物産がメソポタミアにさかんにもたらされた理由のひとつとして、アッカドがイラン諸地域を軍事制圧したことをあげることができる。じっさいアッカド諸王の碑文は、彼らによる西方シリアやイラン各地での征服活動の記述で埋めつくされている。そしてアッカドがイラン西南部のマルハシを制圧したことによって、メソポタミアと東方との交流がいきよに盛んになったように思われる。

近年、前3千年紀後半のイランにかんする研究がめざましく進展しつつある。なかでも、アッカド時代の王碑文だけでなく、ウル第3王朝時代の豊富な行政文書とイラン側の文書をも駆使したシュタインケラーの仕事は、画期的であった(12)。彼によるイランの歴史地理研究の成果は、つぎのように要約される。1) アッカドの王碑文によれば、アッカドにもっともはげしく敵対したイラン諸国のひとつはパラフシュ(Parahš_u)であったが、パラフシュはのちのシュメール語文献にみえるマルハシ(Marhaš_i)のことである(13)。2) パラフシュ/マルハシはアンシャン(首都はテル・マルヤーン)の東方に位置し、キナマーン、ケルマーン、

シャフダド、テペ・ヤヒヤ、ジーロフトを含む地域である。3) パラフシュ/マルハシはアッカド王の征服政策の主目標のひとつであり、それはかなりの程度実現された。つづくウル第3王朝時代にはマルハシは独立を保ち、一貫してウル王朝とのあいだに友好関係を維持していた。4) とりわけウル第3王朝時代には、マルハシは経済的に(またおそらく政治的にも)マガンと密接な関係をきづいていた。5) シマシュキ(Šimaški, LU₂.SU.A.KIとも書かれる)は、ウル第3王朝時代後半になってイラン高原で最強となり、その領域は、北はカスピ海ちかくにまで達し、また南はアンシャンに接していた。シマシュキと他イラン諸国家、ウル王朝との複雑な外交関係は、いわゆる「シマシュキ王名表」やシュメール史料を活用することによって、かなりの程度まで正確に復原することができる。

マルハシは、南メソポタミアで珍重された石の産地として知られていた(「マルハシ石(marhašu/marhuša)」(14)やdu₈-ši-a石(15)など)。シュタインケラーはこのパラフシュ/マルハシをケルマーン・テペ・ヤヒヤ・ジーロフトを包含する地域とした。そしてこの考えは、マジドザーデによるジーロフト地域コナル・サンダルでの近年の発掘のおどろくべき成果とあいまって、おおくの研究者に受け入れられている。少なくとも前3千年紀にはこの地域で独自の文化が大発展していたことが、いまやあきらかになりつつある(16)。〔ただマジドザ・デはジーロフト地域をアラッタと同定したいようであるが、やはりこれは誤りであろう。シュメール語叙事詩で、アラッタはウルクの王エンメルカルやルガルバンダと争った都市と記述されているが、メソポタミアの王碑文や行政文書にアラッタがじっさいに言及された例はない(17)。もしアラッタが伝説上の土地でないとするれば、それはさらに東方、あるいは北方に位置していたとしなければならないであろう。〕

アッカド王朝創始者のサルゴンはパラフシュ/マルハシを破り、みずからを「全土の王、エラムとパラフシュの征服者(字義どおりには殺戮者)」と称している(18)。彼の息子であり、おそらく第3代の王と考えられるリムシュはパラフシュ/マルハシともっとも激しい戦闘をおこなったようであり、彼もまたこの称号を採用している(19)。さらに第4代の王ナラム・シンは「パラフシュにいたるまで」のイラン諸国を征服したことを誇った(20)。

私たちは、これらアッカド諸王がパラフシュ/マルハシを軍事的に制圧したことによって、メソポタミアの東方との交流機会が一挙にふえたと考える。

まず第一に、メソポタミアの人々はさらに東の世界

すなわちメルハについての情報に、より頻繁に接することができるようになったはずである。リムシュ王碑文のひとつに、イラン高原の諸国とメルハがともにパラフシュ/マルハシに同盟してアッカドと敵対したとある (Frayne, RIME 2:57-58, Rīmuš 8)。じっさいこれは、メルハがメソポタミア側のテキストで政治的なコンテキストで言及される唯一の例であるが、アッカドの書記は、パラフシュ/マルハシのさらに東方にメルハが位置していたことをはっきりと認識していた。ウル第3王朝第5代の王であるイビ・シンの碑文によれば、彼のもとに、「メルハのまだらのイヌ」と称されるヒョウ(ないしチーター)がマルハシから届けられている(21)。おなじような事例は、すでにアッカド時代にもみられたにちがいない。

第2に、パラフシュ/マルハシを制圧することによって、この地域で産する鉱物や石材が大量にメソポタミアに流入しはじめたであろう。げんに、さきに言及したリムシュ王碑文によれば、アッカドは、おそらく閃緑岩に同定される eši 石や du8-ši(-a) 石などさまざまな石を「パラフシュの戦利品」として獲得したのである。

第3に、パラフシュ/マルハシからの鉱物や石材は、おおくのばあい、陸路でなく海路で南部メソポタミアに運ばれていたのではなかろうか。パラフシュ/マルハシの中核であったジーロフト地域はホルムズ海峡からはさほどおく離れているわけではなく、鉱物や木材を海岸まで運ぶことは困難ではなかったであろう。これらがさらに対岸のマガンに運ばれ、そこでメソポタミアの船舶に積みかえられ、ペルシア湾を北上したのではなかろうか。マガンは銅の産地としてはやくからメソポタミアに知られていたが、この時代になってディルムンとおなじように東方との中継港としての役割をはたしはじめたというのが、私たちの考えである。

この点で興味をひくのは、「マガンの戦利品」という表現が、閃緑岩に刻まれたナラム・シン王碑文にみえることである(22)。閃緑岩はオマーンでは産しない。だから、ありうるシナリオとは、パラフシュ/マルハシで獲得された閃緑岩がホルムズ海峡をはさんだアラビア半島マガン(オマーン)の港でメソポタミアの交易関係者に引きわたされたということではなかろうか。すこし後、ウル第3王朝の創始者ウル・ナムとほとんど同時代にラガシュ王であったグデアは、閃緑岩(eši)をマガンから輸入したとくりかえし語っている。ただしこのことから、少なくともグデアの時代には、マガンが、現在のオマーンだけでなく対岸のイラン海岸部までをも包含した地名として用いられたので

はないかと考える研究者もいる(23)。プトレマイオスの記述や、古代ペルシア語、現代のイランの地域名 Makran の分析などにもとづいて、もともとマガンはイラン海岸部あるいはイラン海岸部とオマーンをともに指していたという見解もある(24)。

けれどもグデア碑文の記述は、閃緑岩が「マガンの山岳地帯」で産したことの十全な証拠とはいえない。ほとんどの碑文では閃緑岩は「マガンの国 (kur ma2-gan^{ki})」からもたらされると書かれ、「マガンの山 (hur-sag ma2-gan^{ki})」とあるのは、1例だけである (Gudea St. D)。前3千年紀のはやい時期からオマーン地方が、メソポタミアと深い関係をもっていたことは確実である (D.T. Potts 1990 I: 89f.; id. 1997: 168)。いっぽうでオマーンとホルムズ海峡対岸のイラン(とりわけジーロフト地方)とのあいだにも密接な交流があった。オマーンの土器製作はジーロフト地方の工人の移住によって開始されたい (D.T. Potts 2005)。いっぽう、メソポタミアとの交流拠点とみなしうる前3千年紀の港湾遺跡は、いまのところイラン海岸部では発見されていないようである。アッカド時代やウル第3王朝時代に、マガン(オマーン)のための拠点港がイラン海岸部に設けられた可能性はあるかもしれないが、マガンがイランのインド洋海岸部までを広範に包含する地名であったとは、まだ考えにくい。いずれにせよ、すでにナラム・シン王碑文において、「下の海」すなわちペルシア湾がマガンと結びつけて語られている(25)。そしておそらくウル第3王朝時代最末期に成立したとおもわれる書簡テキストでは、ペルシア湾ははっきりと「マガンの海」とよばれるのである。アッカド王朝第2代の王マニシュトウシュは、アンシャンを征服したのちにペルシア湾岸諸国に軍隊を派遣している (Frayne, RIME 2:75-76, Man-ištušū 1)。あきらかにこの軍事遠征は、ペルシア湾の対外貿易の安定化を意図していた。そしてペルシア湾交易ルートは、すくなくともナラム・シン王時代までは維持されていたようにみえる。

III. ウル第3王朝時代

ウル第3王朝時代には、アッカド時代について証明されるようなメルハとの直接交流は、おそらくもはや存在しない。ウル第3王朝時代のラガシュ出土文書に、「メルハの村落の貯蔵庫 (i3-dub e2-dur5 me-luh-ha^{ki})」とよばれる穀物貯蔵庫がしばしば言及され、またときに人名 Me-luh-ha もあらわれるから、かつてパルボラ兄弟はこの時期にメルハ人の村落が存在したと推定した (S. Parpora - A. Parpora - R.H. Brunswig Jr.

1977)。けれども、メル八人がじっさいにラガシュで活動していた証拠を、私たちはほかにはまったく見出すことはできない。この貯蔵庫名のなかにあらわれる me-luh-ha が地名メル八を指示していたとしても、それはむしろ、アッカド時代にメル八人がラガシュに住みついてきたという事実がウル第3王朝時代にまで伝えられていたことを示しているだけなのかもしれない。それは、ウル第3王朝時代にマルハシ(アッカドの王碑文ではパラフシュとよばれていた)からやってきた外交官らが集団で南部メソポタミアに住み、そして彼らにたいして糧食が定期的に支給されていることと対照的である(26)。Me-luh-ha という人名じたいは、かならずしもメル八人の存在を指示しているとはかぎらないであろう。はるかのち、前1千年紀のニネヴェで書かれた「神殿リスト」Canonical Temple List につぎのような章句がみえる。

456) e2-akkil	bīt ^d [nin-š]ubur ša2 kiš ^{ki}
457) e2-akkil-du6-ku3	bīt 2 [š]a2 nippur ^{ki}
458) e2-tilmun-na	bīt 3
459) e2-tilmun-na.ŠA	bīt 4
460) e2-igi-zu-uru16	bīt 5
461) e2-gada-a-ri-a	bīt 6
462) e2-eš-bar-me-luh-ha	bīt 7 ša2 gir2-su ^{ki}

me-luh-ha の語を冠するニンシュブル神の神殿が、かつてギルス (= ラガシュ) に存在していたというのである。テキストを編集したジョージが、これに“House of Decisions, which Cleans the Meš”という訳を与えているように (George 1993, 82)、me-luh-ha は、「清められたメ(神の業^{わざ})」と解釈したほうがよい。これは、ウル第3王朝時代の人名 Me-luh-ha についても妥当するのではあるまいか(27)。いっぽう、この時代の文書に人名 Lu2-Ma2-gan^{ki} がしばしば見出されるが、これは文字どおり「マガンの人」を意味する。

ウル第3王朝時代にもディルムンを介する中継貿易はまだおこなわれていたが(28)、この時代に書かれた無数の文書のなかで、ディルムンへの言及の度合いは、極端に少ない。いっぽう、マガンはしばしば文書にあらわれる。前時代とおなじくマガンで産する銅が大量に南部メソポタミアに輸入されただけでなく、交易中継地としてのマガンの重要性が、この時代にますます高まっていったからである。東方メル八からの物産は主としてマガンにまでもたらされ、それを積んだメソポタミアの船がペルシア湾を航行したようにみえる。

ウル第3王朝の創始者ウル・ナムムは、マガン交易を再開(?)したことを誇っている(29)。またウル王

朝の最後の王イビ・シン治世時に、ある地方知事がイシュビ・エツラ(のちにイシン王朝を創始)の脅威を書簡で王に報告しているが、その書簡のなかで、知事はイシュビ・エツラがすでに「ハマジ国〔北メソポタミア〕からマガンの海まで」をほとんど掌握したと述べているのである(30)。まことにウル第3王朝時代には、ペルシア湾は「マガンの海」、すなわち東方海上交易のための海であった。

ウル第3王朝時代の文書には、「マガンの船」という表現が頻出する。ほとんどのばあい、これは、マガンまで航海するために南部メソポタミアで建造された船を指す。あるラガシュ出土文書は、「マガンの船」建造のためにいかにおおくの木材や瀝青が消費されていたかをよく示している(CT 7 31; cf. D.T. Potts 1997: 131-132)。ただ、いわゆる「使者テキスト(messenger texts)」すなわち、南部メソポタミアからラガシュ経由で東方へ出かけ、また東方よりラガシュに到着した人々に糧食を支給した記録には、マガンへの旅行者にかんする直接的な言及はほとんどみえない。かわってこの種のテキストに、「海」を往還する人たちにたいする糧食支給がしばしば記録されている。彼らのおおくは、マガンまででかけたのであろう。なお彼らはしばしば「王の(命令で)沐浴した人(lu2 a-tu5-a lugal)」ともよばれる。危険な航海の無事が王の前で祈られたようにみえる。

マガンの中継点とする交易が可能になった背景として、イラン高原諸国にたいするウル王朝の巧妙な外交政策をあげることができるであろう。ウル王朝はもっとも東に位置するマルハシとは一貫して友好関係を結んでいた。シュルギ治世10年代にはすでに王女がマルハシの王家に嫁いでいるし、またシュルギ治世後半から王朝末期まで、マルハシからの外交団が継続してシュメール南部の都市に滞在しており、彼らには糧食が支給されている。その他のイラン諸国との関係はもっと複雑であって、ウル王は政略結婚といった懐柔と軍事作戦をくりかえした。ペルシア湾交易の安全性にとって直接的な脅威となりうるのは、テル・マルヤンを首都とするアンシャン国であったろう。アンシャンはペルシア湾岸とりわけマガン(オマーン)を対岸にみるホルムズ海峡に圧力をかけることができたはずである。そのアンシャンにたいしても、ウル王は王女を送り、あるいは軍事制圧をおこなった。さらにはアンシャンをおさえた東北のシマシュキと友好関係を結んでいる。シュルギ治世第34年すなわち「シュルギ王がアンシャンを制圧した年」には、たしかにアンシャンには、メソポタミアから派遣された兵士の軍事キ

キャンプが設営されていた。ラガシュ文書に「アンシャンの兵営から移った」人たちの記録があるからである。そしてこの章句の直前には、「マガンの兵営に移動した」人についての記述があらわれる。アンシャンとマガンの動向とが密接にむすびついていたのである(31)。シュルギ王治世第47年の文書には、マガン経由海外交易の最高責任者であったブドゥが *du8-ši-a* 石をもたらし、また王子のひとりシマシュキを攻撃(?)した功績で、*du8-ši-a* と形容されるサンダルが与えられたとある(32)。*du8-ši-a* は、ある種の緑がかかった色の皮を意味することもあった。

ウル第3王朝時代には、公的なマガン交易は *gaeš* とよばれる高級官僚によって監督された。すでにシュタインケラーは、この時代の *gaeš* は、通商局長官ともいべき役職であると述べて、第2代の王シュルギ治世後半から第4代の王シュ・シン治世末年頃まで活動した *gaeš* ブドゥ (*Bu3-u2-du* と表記されることが多い) について、簡潔に論じている(Steinkeller 2004:104; id. 2006:3)。たしかに現在のところ、おなじ時期に複数の *gaeš* が活動していた証拠はない(33)。そして、公的交易の最高責任者としての *gaeš* の役割は、ほぼまちがいに初期王朝時代までさかのぼる。*gaeš* が陸路による交易を担当していたことを明示する文書はない。ぎゃくにウル第3王朝時代に「商人 (*dam-gar3*)」が海上交易に従事していたかどうか、まだよくわからない。

ブドゥは、多数の船乗りを率いる人々 (*nu-banda3 ma2-gal-gal*) を差配しており(OIP 115 210)、また各地の港湾に倉庫をもうけていたらしい。あるラガシュ文書は、「ブドゥのところから」マガンにでかけていく人物のために、糧食が与えられたことを記録しているが(Nies, UDT 84: 4-6)、ブドゥ自身がマガンまで赴くことがあったのかどうか、よくわからない。彼がウル王権の中核にいたことは、彼の息子のひとりが王女と結婚していたことから推察される(Steinkeller 2004: 104⁴⁶)。彼はマガンを中継地とする物産を集めており、もちろんマガン地方で産する銅の購入も、彼の重要な任務のひとつであった。おそらくイビ・シン王治世はじめにブドゥはその職を息子のひとりル・エンリラにゆずるが、この息子も「海の *gaeš*」としてマガン交易の責任者となり(34)、ウル王権の没落時まで王権のために働きつづけたようにみえる(35)。

ブドゥが生きた時期に書かれたウル文書がほとんどのこっていないために、彼がウルの港湾で輸入した物産の名前を知ることはほとんど不可能であるが、かわりにラガシュ文書から、彼のところに集められた

マガン交易の資本について、かなりの知識を得ることができる。それはラガシュがウル王権のための経済活動(とりわけ農業生産と羊毛工業)の中心地域であったからである。シュ・シン王治世末年ちかくの文書によれば、ブドゥはマガン交易のためラガシュ知事から600グル(180,000リットル)もの大麦を供出させていた(36)。

gaeš の資本集積にかんして、おそらくシュルギ治世30年代に書かれたラガシュ文書CT 9 18が興味ある例を示している。この文書は、「前(?)知事」の肩書をもつアバムの財産のうち穀物を調査した記録である。王がアバムの財産を没収するために、彼の財産調査を命令しているのである(Maekawa 1986: 147)。そのなかにつぎのような章句がある。CT 9 18, rev. iii 4) 122;4.4.0 *gur*, 5) *e2 lu2-uru-mu i3-si*, 6) *ki du10-ga dumu gaeš*, 7) *ša3 a-suhur^{ki}*, 8) 186;4.4.4 *silā3 gur*, 9) *e2-gaeš i3-si*, 10) *gir3 ur-^dgiš-bar-e3*, 11) *u3 an-ne2-ba-du7*, 12) 35;4.3.3 *silā3 gur*, 13) 5;4.2.7 *silā3 ziz2 gur*, 14) *še gan2 apin-la2*, 15) *ki bu3-du11*, 16) *ša3 ur-sag-pa-e3*。おそらくこれらは、アバムおよび彼の一族のものであった大麦が *gaeš* の息子ドゥガのところに(rev. iii 4-7)、「*gaeš* の家」に(viii 8-11)、そして *Bu3-du11* なる人物のところに集められた(viii 12-16)と読むべきなのであろう。私たちは *gaeš*、および *Bu3-du11* とよばれているのは、他の文書で *Bu3-u2-du* としてあらわれる人物ブドゥのことだと考える。ブドゥ自身と彼の息子が異なるセトゥルメント(*ur-sag-pa-e3*, *a-suhur^{ki}*)に大麦を集積していることにも注意しておきたい。またNies UDT 38も、さまざまな手段で「ブドゥのための大麦」が集められていたことを示している(37)。

ブドゥのべつの息子ル・エンリラも、マガン交易にさいして1800グルもの大麦をギルス知事から徴発していた(38)。イビ・シン王時代に書かれたウル文書によれば、ル・エンリラは大麦いがいに羊毛製品や植物油をも、ウルから送りだしていた(39)。

ウル文書からはまた、交易をつうじて東方から到来した品目について、かなり詳しい情報を得ることができる。「マガンの銅」などマガン産と推定されるものいがいに、「マガンのアシ」(40)、「メルハの銅」、「メルハのアバ木材」、象牙(製品)などが運ばれてきたのである。

IV. イシン・ラルサ時代、バビロン第1王朝時代

ウル第3王朝が崩壊するとともに、公的交易の中継地としてのマガンの役割がおわる。おそらくこれは、南部メソポタミアに分立する小国家が、もはやペルシ

ア湾岸部とりわけマガンや対岸のイラン海岸部にまで政治的影響力をおよぼすことができなくなったからであろう。南部メソポタミアから出土する経済文書には、交易先としてマガンが言及されることはない。かわってウル文書に、ディルムンにまで交易活動にでむく人々についての言及がある (Oppenheim 1954; Leemans 1960)。ふたたびディルムンがメソポタミアのために中心的中継港として機能しはじめたのである。ただしディルムン交易は、古バビロニア時代以降も活発であったとはおもわれない。そしてディルムン交易についての具体的な記憶がうすれはじめたころ、ディルムンの名がアラッタとともに、アッカド語の *kabtu* (‘noble, important’) と同義語であるとして、文学テキストで用いられはじめる。

ほどなく、メソポタミアへの銅の供給地としてのマガンの役割も、ほとんど終わるのであろう。こののち銅はアナトリア、東地中海地域からメソポタミアにもたらされるようになる。ほぼ時期をおなじくして、東方ではインダス文明が姿を消す。もはやメソポタミアの人々は、メルハをインダス河地域と認識できなくなるであろう。

(1) *zabar-dil₂ ma₂-dilmun* (e.g. DP 69, i 1).

(2) *ma₂-dilmun kur-ta gu₂-giš mu-gal₂* (Frayne, RIME 1: Ur-Nanše 2, 17, 22, 23); *ma₂-dilmun gu₂-gi² mu-gal₂* (Ur-Nanše 5, 6a). なお「木材(*giš*)」の直前にみえる語 *gu₂* についての解釈は、まだ確定的ではない。さいきんフレインは Ur-Nanše 2 その他にみえる表現を、“(Ur-Nanše, king of Lagaš) had ships of Dilmun submit timber as tribute from the foreign lands (to Lagaš)” と訳している (Frayne, RIME 1 84 et passim). Cp. Cooper, SARI I 23: “(Urnanshe, king of Lagash,) had ships of Dilmun transport timber from foreign lands (to Lagash); Heimpel 1987:70: “(Dem Ur-Nanše, König von Lagaš,) legten sich Tilmunsschiffe aus dem Land (nämlich Tilmun) das Joch auf den Nacken.”

(3) E.g. Fö 194, i 1) [*X*]+14 *ma-na A.EN-da.urudu*, 2) *nig₂-sa₁₀-ma*, 3) *lugal-an-da*, ii 1-2) *ensiz-lagaš^{ki}-ra*, 3) *ur-^{den}-ki*, 4) *dam-gar₃*, 5) *kur-dilmun^{ki}-ta*, iii 1) *mu-na-DU-a*, 1.

(4) ED Metals 27) *gin₂-dimun*; cf. Picchioni, MEE 15 19: *Ešbar-kin* (Ebla) v 4) *dilmun-gin₂*.

(5) ARET 5 7, xi 4) *SAR².[D]UB² MAH.X X [] X.GIŠ.ŠE^{ki}*, xii 1) *ŠUBUR^{ki} Sum-ar-rum₂^{ki} TILMUN^{ki}*, 2) *GAR in ŠU in [D]UB².ŠE₃ DINGIR.*

DINGIR X X “ ..., X.GIŠ.ŠE^{ki}, Subar, Sumer, and Tilmun, were placed in (his/her) hand ” (Krebernik 1992: 93).もちろんこの文学作品は、南メソポタミア起源とみなしてよい。

(6) RTC 21, i 1) 60 *naga gur-sag-gal₂*, 2) 60 *ma-na nig₂-ib*, 3) 10 *ma-na kur-gi-rin*, 4) 21 *giš-hur*, 5) 1 *GAD+A urudu*, ii 1) 1 *la-ha-an-kur-ra*, 2) *nam-gaeš₂-ak*, 3) *ma₂-elam-ka-kam*, 4) *gir₃-ni-ba-dab₅*, 5) *gaeš₂-mah-e*, iii 1) *e₂-gal-la*, 2) *i₃-DU*, 5; DP 518, i 1) 5 *ma-na na₄ si-sa₂-ta sig₂-ba gal-gal*, 2) *bar-tug₂-bi 3-am₆*, 3) 5 *ma-na ku₃-luh-ha*, 4) *nig₂-sa₁₀-ma-kam*, ii 1) *bara₂-nam-tar-ra*, 2) *dam lugal-an-da*, 3-4) *ensiz-lagaš^{ki}-ka-ke₄*, 5) *gir₃-ni-ba-dab₅*, 6) *gaeš₂-ra*, iii 1) *e₂-gal-la*, 2) *e-na-la₂*, 3) *kur dilmun^{ki}-še₃*, 4) *ba-DU*, 6.

(7) Sargon 11 (Frayne, RIME 2 28), Sum. 9) *ma₂-meluh-ha^{ki}*, 10) *ma₂-ma₂-gan^{ki}*, 11) *ma₂-dilmun^{ki}*, 12) *kar-ag-ge-de₃^{ki}-ka*, 13) *bi₂-keš₂*; Akk. 11) *MA₂ meluh-ha*, 12) *MA₂ ma₂-gan.KI*, 13) *MA₂ tilmun.KI*, 14) *in ka₃-ri-im*, 15) *ši a-ka₃-de₃.KI*, 16) *ir₃-ku-us* [He moored the ships of Meluhha, Magan, and Tilmun at the quay of Agade.]これが、楔形文字テキストのなかでディルムン、マガン、メルハを並べて記述する、もっともはやい例である。なお、マガン、メルハへの言及があるとしてミカロウスキ (Michalowski 1988) によって紹介されたテキストは、初期王朝時代にはさかのぼらず、アッカド時代ないしグデア王時代の作品のようにみえる。ISET 1 212, i 6) *ma₂-gan^{ki}*, 7) *me-luh^{ki}*, 8) *gu₂ giš ha-ra-ab-gal₂*.

(8) BIN 8 298, rev. 1) 1 *i₃ sila₃*, 2) *da-ti*, 3) *lu₂-tuš ma₂ me-luh-ha-ka*; Yang Zhi, Adab A 712, 10) []+5; 0.0.0 *še-ba 4 guruš ma₂ me-luh-ha*; Yang Zhi, Adab A 1014, 3) 0;0.3.0 *me-luh-ha-m[e]*; Banca d Italia, Adab 102, recto 1) 0;0.1.0 *i₃-šah₂ giš^{ki}sum-ma sila₃*, 2) *e₂-nig₂-gur₁₁-ta*, 3) *mu-ni-ra*, 4) *an-na-sum*, verso 1) *gir₃-gin-na*, 2) *ma₂ me-luh-ha-še₃*, ...; CT 50 76, obv. 1) 10 *gin₂ ku₃*, 2) *ku₃ zu₂-gul-la-kam*, 3) *UR.UR ni-is-ku*, 4) *dumu amar-lu₂-KU*, 5) *lu₂-sun₂-zi-da*, 6) *lu₂ me-luh-ha-ke₄*, 7) *i₃-na-ab-su-su ...*

(9) 「メルハの通訳」シュ・イリシュの印章 (アッカド時代) がのこっている (Collon 1987: No. 637)。通訳者のセム系人名に注意せよ。

(10) たとえばラガシュ出土文書 ITT 1 1418 は「ディルムン船」(建造?) のために多数の人々が動員されている記録である。なおこの時代には、シュメール北部の都市ニップルでも、「ディルムン船」を瀝青で補強している (Westenholz, OSP 2 128, 132)。

(11) もっとも典型的な作品は、ゾウ、ワニ、サイが描かれているテル・アスマル出土印章（おそらくアッカド時代後期）である（Frankfort 1955: Pl. 161, No. 642; Collon 1987: No. 610; D.T. Potts 1997: Fig. XII 5）。アッカド第5代の王シャルカリシャリのもとで働いた書記イブニ・シャルムの印章には水牛が描かれている（Collon 1987: No. 529）。なおこれらの動物がじっさいにメソポタミアに到来していたのかどうか、まだわからない。また、アッカド時代にメルハの物産や生物がすべて海路でメソポタミアにもたらされたわけではないであろう。イラン高原を經由して、あるいはイランにしばらくとどまったのちにメソポタミアに陸路で到来したこともあったにちがいない。ウル第3王朝時代のラガシュで書かれた「使者テキスト」では、南イランのアンシャンからの使者がシュメール北部のニップルを經由してラガシュに到着したと明記されることがおおい。メソポタミアとイランとの陸路についてはポッツの論述を参照のこと（T.F. Potts 1994: 38-43）。

(12) シュタインケラーの2007年論文にみえる地図（Steinkeller 2007: 219）を、1982年論文のそれ（Steinkeller 1982: 265）と比較することで、前3千年紀後半イラン高原にかんする彼の歴史地理研究の進展を、よく理解することができる。前者では、1) シマシュキの領域がより拡大されて描かれており、2) またマルハシの領域がイラン海岸ちかくジーロフト地域までを含むと、はっきりと指示されている。いっぽう新地図からはアラッタが消えている。

(13) パラフシュをマルハシに同定する考えは、ヴェステンホルツ（Westenholz 1999: 91）をのぞく研究者によって承認されている。

(14) 「マルハシ石」は、ウル第3王朝時代いらい、さまざまな時代の語彙リスト（e.g. MSL 10 58, HAR-ra XVI, Forerunner from Nippur: 119）、行政文書、文学テキスト（e.g. Lugal-e [van Dijk] 595, 597, 600, 602）にあらわれる。石名が地名に由来することは、まちがいない。同定は確定していないが、シュタインケラーはクロライト（緑泥石）ないしはステアタイト（凍石）ではないかとしている（Steinkeller 2006: 2-3）。

(15) パピロニアの語彙リストでは、*du8-ši-a* 石は、しばしば「マルハシの」と形容される（e.g. MSL 10 5, HAR-ra XVI 27: *na4.du8-ši-a-mar-ha-ši: MIN pa-ra-ši-i*）。*du8-ši-a* がなにを指すかも研究者によって見解がわかる。たとえばシュタインケラーは1982年には瑪瑙ないし玉髓と推定していたが（Steinkeller 1982: 250）、この語が緑青を使ったある種の皮革の色を指すばあいがあることから、さいきんはマルハシ石とおな

じく、クロライトないしステアタイトであろうと考えている（Steinkeller 2006: 3-5）。つまり彼は *du8-ši-a* と *marhušu* がおなじ石にたいする名称である可能性が高いとしているが、いっぽうで彼は、類似の2種類の石（クロライトとステアタイト）についての、それぞれの呼称である可能性もあるという（Steinkeller 2006: 6-7）。

(16) 大規模な盗掘ののちジーロフト地域で開始された調査、発掘については、とりあえず Lawler 2004 を参照のこと。ただ2003年にテヘランで公刊されたマジドザーデの書物（筆者未見）には、手きびしい評価がある（Muscarella 2005）。なお2008年6月に総合地球環境学研究所（京都）で開催されたインダス文明とイランとの交流にかかわる国際シンポジウムにおいて、マジドザーデが現段階でのコナル・サンダル発掘成果を報告している。

(17) かつてエアンナIII層時代のウルク文書にアラッタの名前がみえると考えられたこともあるが（ZATU No. 35）、これには否定的な見解がおおい。

(18) Sargon 8 (Frayne, RIME 2:23-24), 1) *šar-ru-GI*, 2) LUGAL, 3) KIŠ, 4) [S]AG.GIŠ.RA, 5) [N]IM.KI, 6) *u3*, 7) *pa2-ra-ah-šum.KI* [Sargon, king of the world, conqueror of Elam and Parahšum.]

(19) 「リムシュ、全土の王、エラムおよびパラフシュの殺戮者」は *Rīmuš* 9 (Frayne, RIME 2: 59-60) および *Rīmuš* 17 (RIME 2: 67) にみえる。「エラムおよびパラフシュを殺戮したとき」という表現も、おおくのリムシュ碑文にあらわれる（e.g. *Rīmuš* 11 [RIME 2: 62]）。

(20) *Narām-Sîn* 25 (Frayne, RIME 2: 130), 1) *na-ra-am-dEN.ZU*, 2) LUGAL, 3) *a-ka3-de3.KI*, 4) *ša-piz-ir*, 5) KIŠ MI KAM, 6) KALAM, 7) NIM.KI, 8) *ka3-liz-šama*, 9) *a-di3-ma*, 10) *pa2-ra-ah-šum.KI*, 11) *u3*, 12) KALAM, 13) [Š]UBUR^š*-bar-tim.KI*, 14) *a-di3-ma*, 15) GIŠ.TIR, 16) [GI]Š.ERIN [Narām-Sîn, king of Agade, commander ... of all the land of Elam, as far as Parahšum, and the land of Subartum as far as the Cedar Forest.]

(21) *Ibbi-Sîn* 4 (Frayne, RIME 3/2: 374), 9) *ur-GUN3-a-me-luh-ha^{ki}*, 10) *m[ar-h]a-ši^{ki}-[ta]*, 11) *gu2-un-še3 mu-na-ab-tum2-ma-ni*, 12) *tam-š i-lum-bi*, 13) *mu-dim2*, 14) *nam-ti-[a-n]i-še3*, 15) *a mu-na-[r]u*, 16) *ur-GUN3-a-ba*, 17) *he2-[d]ab5*, 18) *mu-b[i-i]m* [(Ibbi-Sîn) fashioned an image of a Meluhhan speckled “dog” (= leopard?) that had been brought to him as tribute from Marhašī.] シュタインケラーも、これをヒョウとする

が (Steinkeller 1982: 253; 2006: 11)、ポッツはチーターと考えている(D.T. Potts 2002)。

(22) Narām-Sîn 4 (Frayne, RIME 2:100), 1) na-ra-am^dEN.ZU, 2) LUGAL, 3) ki-ib-ra-tim, 4) ar-ba-im, 5) BUR, 6) NAM.RA.AK, 7) ma₂-gan.KI [5-7: a bowl, booty of Magan]. このテキストにかんしては、T.F. Potts 1989: 133-136; id 1994: 235-236; cp. D.T. Potts 1986.

(23) Waetzoldt 1992:135; Heimpel 1982; D.T. Potts 1986; id.:1990a 142-143.

(24) D.T. Potts 1986: 274-275.

(25) Narām-Sîn 1004 (Frayne, RIME 2: 163), 9) kur-šubur-r[a] gaba-gaba-a-ab-[ba l]GI.NIM-ma x [x], 10) u₃ ma₂-gan.KI ma-da-[ma-da-bi] kur x [...], 11) bal-ari a-[ab-ba ...] [The land of Subartum on the shores of the Upper Sea, and Magan, along with its provinces ... the other side of the sea ...]

(26) プズリシュ・ダガン文書のなかに、マルハシから派遣された使者たちに小家畜などを与えた記録が、すくなくともシュルギ治世末期からイビ・シン王初年にいたるまで、ほとんど途ぎれることなくのこっている (Michalowski 2005: 73-74 [Excursus 1: The rulers of Marhaši and their envoys to the Ur III court]).

(27) 「神殿リスト」CTL 458 にみえる e₂-tilmun-na については、ジョージは、"House of the Noble" ないし "Tilmun-House" と解釈している (George 1993: 150)。なおイナンナ神のための同名の神殿がウルにも存在していた。CTL 343 e₂-[tilmun-na]: [bīt] 20 ša₂ ur₂^{ki}; MSL 13 73: Proto-Kagal 227) e₂-dilmun. イシン・ラルサ時代の王碑文にもこの神殿が言及されている Išme-Dagān 9 iv 7 [Frayne, RIME 4:41]; Warad-Sîn 27, 32 [RIME 4: 253]. フレインは後者にみえる e₂-dilmun(-na)を "Solemn House" と訳しているが、いうまでもなく、これは、バビロニア人が dilmun の語にアッカド語 *kabtu* の訳を与えていたことを前提としている。

(28)イビ・シン治世1年のウル文書によれば、大量の羊毛がディルムンに運ばれている(UET 3 1507)。

(29) Ur-Nammu Law Code (Roth, Law Collections 15) (A ii 78-86) ki-sar-ra ma₂ Ma₂-gan^{ki}-na^dNanna a₂^dNanna lugal-ga₂-ta he₂-mi-gi₄ Ur₂^{ki}-ma ha-ba-zalag₂ [By the might of the god Nanna, my lord, I returned Nanna š Magan-boat to the quay(?), and made it shine in the city of Ur]; Ur-Nammu 17 (Frayne, RIME 3/2: 41), 12) gaba-a-ab-ka-ka 13) ki-SAR-a nam-gaeš bi₂-sa₂, 14) ma₂-ma₂-gan šu-na mu-ni-gi₄ [On the

shore he had trade reach (the) ki-SAR-a (and) returned the ships of Magan into his (Nanna š) hands.]

(30) Michalowski 1976: No. 21 (Puzur-Šulgi to Ibbi-Sin), 10) ma-da ha-ma-zi^{ki}-ta en-na a-ab-ba ma₂-gan-na^{ki}-še₃.

(31) MVN 10 149, ii 6-7) 70 guruš u₄ 1-še₃, ugnim(SU.KU.ŠE₃.KI.GAR.RA) ma₂-gan^{ki}-še₃ bal-a, 8-9) 30 la₂-1 guruš u₄ 1-še₃, ugnim an-ša-an^{ki}-ta bal-a. 私たちの解釈とはちがって、シュタインケラーはこれらの章句後半部を前半部ときりはなして、それぞれ "troops transferred to Makkan", "troops transferred from Anšan" と訳している (Steinkeller 2007: 226⁴⁵)。 (32) MVN 13 672, obv. 1) 1^{kuš} e-sir₂ du₈-ši-a [e₂]-ba-an, 2) bu₃-u₂-du, 3) u₄ ^{na⁴}du₈-ši-a mu-ni-kux-ra-a, 4) 1^{kuš} e-sir₂ du₈-ši-a e₂-ba-an, 5) šu^d-den-lil₂ dumu-lugal, rev. 1) u₄ LU₂.SU.A^{ki} mu-tag-tag-a, 2) im-PI-e-eš₂, 3) e₂-a-i₃-li₂ maškim, 4) ki e₂-a-i₃-li₂-ta, 5) ba-zi, 6) ša₃ ki-sur-ra^{ki}, 7) iti mašda-ku₃-gu₇-a-kam, 8) Š 47. この文書前半部分は、シュタインケラーによって紹介されている (Steinkeller 2006: 3¹⁹)。

(33) おそらくシュルギ王治世中頃にウル・ニギムなる人物が「海の gaeš」として活動していた(Frayne, RIME 3/2:222, Šulgi 2036)。彼とブードゥとの関係は、まだわからない。

(34) ル・エンリラは、イビ・シン王より下賜された印章をもっており、このなかで彼は「海の gaeš (gaeš a-ab-ba-ka)」とよばれている。なおこの印章が押されている UET 3 41 (Ibbi-Sin 19) は裁判記録なのであって、ル・エンリラは裁判で「裁判判事(di-ku₅)」の役割をはたしている。彼がブードゥの息子であることを直接的に示す文書は UET 9 962, UET 9 371 である。両テキストとも海外交易にかかわる記録であり(前者には「海外交易 (nam-gaeš a-ab-ba-ka)」という章句がみえ、後者では輸入された鉱物、石材が言及されている)、人名はそれぞれ lugal^d-den-lil₂-la₂ dumu bu₃-u₂-du (obv. 4 '5'), lu₂-den-lil₂-la₂ dumu KA.MAH[?](rev. 5 '6')と転写されているが、前者の前半部は lu₂-den-lil₂-la₂、後者の後半部は dumu bu₃-u₂-du の誤写と推定できる。

(35) UET 3 702 には、イシンでの買いつけを実行するため (mu nig₂-sa₁₀-ma in-si-in^{ki}-še₃ [rev. 9]) 大小の諸神殿から大量の金、銀、銅などが供出されたことが記録されている。穀物買いつけのためイシュビ・エッラがイシンに派遣され、のち彼がイビ・シン王を裏切ったことはイシュビ・エッラと王とのあいだの往復書簡

によってよく知られているが、これはそれを想起させる重要な記録なのである。そしてこの文書で、供出命令を伝えた(gir₃ [rev. 12])とされるル・エンリラが同名のgaešと同一人物であるというのは、じゅうぶん にありうる。文書の成立年であるイビ・シン13年には、「海のgaeš」ル・エンリラは、まだ活動していた(前註参照)。

(36) ITT 2 776, obv. 1) 600;0.0.0 še gur, 2) gu₂ ma₂-gan-še₃, 3) ki ensi₂-gir₂-su^{ki}-ta, 4) bu₃-u₂-du, 5) šu ba-ti, 6) kišib ur-gi₆-par₄, rev. 1) dumu šu-na-ka, 2) i₃-dub a-ša₃ i₃-zi-na, ...

(37) UDT 38, obv. 1) [x]+20;0.0.0 še gur-lugal, 2) še bu₃-u₂-du, 3) ša₃-bi-ta, 4) 62;4.0.0 sa₂-du₁₁ ensi₂, 5) 40;0.0.0 eš₃-didli, 6) 30;0.0.0 ur-mes dumu ba-da-ri₂², 7) 75;0.0.0 X.[], rev. 1) ur₅-bi-še₃-ba-du₁₁, 2) 10;0.0.0 ur-SUKKAL, 3) 1;1.0.0 lu₂-kal-la, 4) (erased).

(38) TCTI 2 L. 2768 (tablet), obv. 1) 1800;0.0.0 še gur, 2) numun gub-ba ma₂-gan-na, 3) ki ensi-gir₂-su^{ki}-ta, 4) lu₂-den-lil₂-la₂, 5) šu ba-ti, 6) mu lu₂-den-lil₂-la₂-še₃, rev. 7) kišib ur-kisal dumu lugal-mug²(AŠ+NI), 8) gur-bi su-su-dam (Ibbsi-Sin 3).

(39) UET 3 1689, obv. 1) 300 tug₂ guz-za [gin], 2) 300 tug₂.sag-uš-bar, 3) 300 tug₂.uš-bar, 4) ki ur-^dšul-gi-ra-ta, 5) 2/3 gu₂ sig₂-GI, 6) e₂-dub-ba-ta, 7) nig₂-sa₁₀-ma urudu ma₂-gan^{ki}, ... rev., 3) lu₂-den-lil₂-la₂, 4) šu ba-an-ti (Ibbsi-Sin 4); UET 3 1511, obv. 1) 60 gu₂ sig₂-GI, 2) 10 gu₂ u₂-NIN₉[], 3) 20 gu₂ PEŠ.X.[], 4) e₂-dub-ba-ta, 5) 70 tug₂.uš-bar, 6) ki ur-^dšul-gi-ta, 7) 6;0.0.0 i₃-giš-du₁₀-ga gur, 8) ki lugal-gaba-ta, rev. 1) 180 kuš.[], ... 4) nig₂-sa₁₀-ma urudu-še₃, 5) lu₂-den-lil₂-la₂, 6) šu ba-an-ti (Ibbsi-Sin 2).

(40) 「マガンのアシ」は、槍などの製作に用いられている。ウェツォルトは、オマーンやホルムズ海峡対岸部では「アシ」は産せず、「竹」ではないかという。とすれば、この語の「マガン」とは中継地を指しているにすぎないということになる(Waetzoldt 1992: 135)。

文献

Collon, D.

1987 *First Impressions: Cylinder Seals in the Ancient Near East*, London.

Cooper, J.S.

1986 *Sumerian and Akkadian Royal Inscriptions*, Vol. 1, New Haven [= SARI 1].

Frankfort, H.

1955 *Stratified Cylinder Seals from the Diyala Region*

(Oriental Institute Publications 72), Chicago [= OIP 72].

Frayne, D.R.

1990 *Old Babylonian Period (2003-1595 BC)* (The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Periods, Vol. 4), Toronto [= RIME 4].

1993 *Sargonic and Gutian Periods (2334-2113 BC)*, Toronto [= RIME 2].

1997 *Ur III Period (2112-2004 BC)*, Toronto [= RIME 3/2].

2008 *Presargonic Period (2700-2350 BC)*, Toronto [= RIME 1].

George, A.R.

1993 *House Most High: The Temples of Ancient Mesopotamia*, Winona Lake.

Green, W.G. und H.J. Nissen

1987 *Zeichenliste der archaischen Texte aus Uruk: Archaische Texte aus Uruk 2*, Berlin [= ZATU].

Heimpel, W.

1982 A first step in the diorite question, *Revue d'Assyriologie* 76, 65-67.

1987 Das Untere Meer, *Zeitschrift für Assyriologie* 77, 22-91.

Krebernik, M.

1992 Mesopotamian myths at Ebla: ARET 5, 6 and ARET 5, 7, in: Fronzaroli, P. (ed.), *Literature and Literary Language at Ebla* (Quaderni di Semitistica 18), Firenze, 63-149.

Lawler, A.

2004 Iranian dig opens window on new civilization, *Science* 21 Vol. 304 (May 2004), no. 5674, 1096-1097.

Leemans, W.F.

1960 *Foreign Trade in the Old Babylonian Period*, Leiden.

Maekawa, K.

1996 Confiscation of private properties in the Ur III period, *Acta Sumerologica* 18, 103-168.

Michalowski, Piotr

1976 *The Royal Correspondence of Ur* (PhD Dissertation, Yale University).

1988 Magan and Meluhha once again, *Journal of Cuneiform Studies* 40, 156-64.

2005 Iddin-Dagan and his family, *Zeitschrift für Assyriologie* 95, 65-76.

Muscarella, O.White

2005 Jiroft and "Jiroft-Aratta": A review article of Yousef Madjidzadeh, Jiroft: The Earliest Oriental Civilization,

Bulletin of the Asia Institute 15, 173-198.

Oppenheim, A.L.

1954 The Seafaring merchants of Ur, *Journal of the American Oriental Society* 74, 6-17.

Parpola, S., Parpola, A., and R.H. Brunswig, Jr.

1977 The Meluhha village. Evidence of acculturation of Harappan traders in late third millennium Mesopotamia?, *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 20, 129-164.

Potts, Daniel T.

1986 The booty of Magan, *Oriens Antiquus* 25, 271-285.

1990 *The Arabian Gulf in Antiquity*, Vol. 1-2, Oxford.

1997 *Mesopotamian Civilization: The Material Foundations*, London.

2002 Total prestation in Marhashi-Ur relations, *Iranica Antiqua* 37, 343-357.

2005 In the beginning: Marhashi and the origins of Magan's ceramic industry in the third millennium BC, *Arabian Archaeology and Epigraphy* 16, 67-78.

Potts, Timothy F.

1989 Foreign stone vessels of the late third millennium B.C. from southern Mesopotamia: their origins and mechanisms of exchange, *Iraq* 51, 123-164.

1994 *Mesopotamia and the East: An Archaeological and Historical Study of Foreign Relations ca. 3400-2000 BC* (Oxford University Committee for Archaeology Monograph 37), Oxford.

Steinkeller, Piotr

1982 The question of Marhaši: A contribution to the historical geography of Iran in the third millennium B.C., *Zeitschrift für Assyriologie* 72, 237-265.

1988 On the identity of the toponym LÚ.SU(. A), *Journal of the American Oriental Society* 108, 197-202.

1989 Marhaši, *Reallexikon der Assyriologie* Bd. 7, 381-382.

2004 Toward a definition of private economic activity in third millennium Babylonia, in: Rollinger, R. and Chr. Ulf (eds.), *Commerce and Monetary Systems in the Ancient World: Means of Transmission and Cultural Interaction* (Proceedings of the Fifth Annual Symposium of the Assyrian and Babylonian Intellectual Heritage Project Held in Innsbruck, Austria, October 3rd-8th 2002), Stuttgart, 91-111.

2006 New light on Marhaši and its contacts with Makkan and Babylonia, *Journal of Magan Studies* 1, 1-17.

2007 New light on Šimaški and its rulers, *Zeitschrift für Assyriologie* 97, 215-232.

Waetzoldt, H.

1992 'Rohr' und dessen Verwendungsweisen anhand der neusumerischen Texte aus Umma, *Bulletin on Sumerian Agriculture* 6, 125-146.

Westenholz, A.

1999 The Old Akkadian period: History and culture, in: Attinger, P. und M. Wäfler (hrsg.), *Mesopotamien: Akkade-Zeit und Ur III-Zeit*, Freiburg-Göttingen, 17-117.

シリア・アパメア遺跡の列柱道路 ローマ都市の街路事例研究

辻村純代

計画研究「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」連携研究者

アパメア遺跡（写真1）

シリア北西部を流れるオロンテス川の西岸の緩やかな丘陵上に、アパメアの列柱道路が南北2kmに亘ってまっすぐに伸びている。シリア最大の規模を誇るこの都市はトルコ国境に近い北のキルフスとホムスを結ぶ途上にあり、いっぽう地中海沿岸のラタキアとも繋がる交通の要衝に位置する。多くの泉に恵まれた山々に囲まれ、近くに川が流れるこの地域は豊かな農業生産地として知られるばかりでなく、セレウコス世によって創建された頃から軍馬の繁殖地としても有名であった¹。

建物群の保存状況が思わしくない理由の一つは1157年の地震であり、その後も維持されたのは都市からは隔たる西方の小丘陵上に営まれたシタデルだけであった。しかし、アパメアが地震に襲われたのはこの時だけではない。1度目は紀元後115年、2度目は6世紀後半に起こった。2度目の地震がしばらく続くなか、ペルシアによる略奪と焼き討ち（後573年）にあい、その支配に屈したのちビザンチンとアラブとの戦いに巻き込まれた経緯からすると、6世紀末にはもはや都市としての命脈は尽きてしまったといっている。

これに対し、1度目の大地震はアパメアにさらなる発展をもたらした。ローマ皇帝・トラヤヌス（98-117

年）が都市の再建を命じたからである。再建には数世紀を要し、現在みられる列柱道路が完成をみたのはマルクス・アウレリウス（161-80年）の治世下で、この時期がアパメアの最盛期といえる。列柱道路（カルド）が都市の中央を貫き、それに直交する2本のデクマヌスを含めて東西方向の街路15本が走っている。列柱の様式からみて、ローマ時代に再建された街路が2度目の地震による崩壊に至るまで都市の骨格をなしていたことは間違いない。

再建時には列柱だけでなく、路面の敷石にも補修の手が及んだに違いないがその範囲は定かでなく、また、再建後も馬車の通行による摩滅や地震による損壊等で幾度も補修が行われたらしく、石の大きさや敷き方は一様でない。敷石の保存状態が良好でない上に、夏の期間は草に邪魔されて詳細な観察はできなかったが、ここにみられる敷石の形と敷き方はローマ本国の都市におけるそれとは些か異なっているように思われる。そこで、筆者が訪ねることのできた西アジアのローマ都市の街路観察から得た情報と若干の考察をまとめることとした。

なお、本稿は筆者が研究分担者として参加した文科省科学研究費（『古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究』研究代表者：岡田保良）によって2006年度、及び2007年度のヨルダンとシリアでの調査によって得られた成果を基にしている。



写真1 アパメア遺跡

石敷道路の歴史

12世紀末、道にたまる泥水に困ったフランス王が道路を石敷にしたのがヨーロッパにおける石敷道路の始まりと言われている。そして段差のある歩道がパリに作られたのは、さらに600年ものちのことであったⁱⁱ。しかし、街路に石を敷いた歴史は、これら中世ヨーロッパの事例から遙か以前に遡るⁱⁱⁱ。クレタのクノッソス宮殿（前2000～1600年）には下層に石膏モルタル、中層にロームモルタル、上層に石灰岩と玄武岩製

の石を敷いた例があり、アッシリアの都・アシュールの神殿前にはレンガ敷きの上に石灰岩を配した祝祭用の行列路が造られている。同様の行列路は、ネブカドネザル 世によって再建されたバビロンにも知られており、のちのボスラやペトラの列柱道路につながっていく性格をもっている。

いっぽう、ギリシアで発達した石灰モルタルを用いた舗装道路は次第に石敷舗装に変わっていくと同時に、街路としての機能性を高めていった。イタリアでは前4～3世紀になるとポローニャ付近にあるエトルリアの都市・マルザポットに幅15mの車道に加えて歩道や排水溝、さらには雨水除けの踏み石まで備えた舗装道路が現れる。そしてローマ時代には、ポンペイにみるように敷石街路は市内全体を廻り、交通システムとして確立するに至るのである。

ローマ時代以前に建設された西アジアの諸都市にみる主要街路も、その多くはギリシア起源の石敷舗装であったと思われるが、ペトラには列柱道路以前に作られたナバテア時代の石敷が岩山の隘路・シークに残っていて、都市プランと同様、独自に発生をみたものもある^{iv}。そこでは、うねうねと屈曲する細い道に方形に近い形の小型石灰岩が敷かれ、道路の両側には縁石を配した歩道が作られている。道路の敷石と違って、歩道には柔らかな砂岩を用いている（写真2）。

道路建設の巧みさは、路面の石の敷き方にも表われる。石材は切石ではないが、隙間を作らないように方形に近い石を道路の中央に並べ、丸石を屈曲部に充填している。敷石の並びは、縁石に対して斜交する傾向が認められるものの、直交部分も少なくないのは屈曲する道路ではむしろ自然であろう。道路の両側に切り立つ砂岩の岩山は、この道がしばしば洪水の通り道であったことを示しており、外部からカズネに向かって下降する道の傾斜が自然の状態であれば都市の洪水被害は甚大なものであったに違いない。つまり、敷石はこの傾斜を緩やかにし、かつ土砂の流入を阻止することで被害を少なくしようと意図されたものだったと推定されるのである。

発掘報告書には、さらに敷石として選んだ堅牢な石灰岩に残る轍に注目して興

味深い考察が続いている。その轍は都市建設に必要な巨石を運んだ際に刻まれたものに限定されるというのである。なぜなら、ナバタイが伝統的に使っていたのはラクダで、交易品や荷駄はその背に積まれるから轍が残るはずはなく、後2世紀と推定されている列柱道路の石敷には顕著な轍が認められないからである。

この列柱道路の敷石はシークにみるナバタイ時代の敷石と違って、長方形の大型切石（Opus quadratum）を用い、縁石に対して斜交して並べている。この並べ方は西アジアのローマ都市では極めて一般的で、車輪が石と石の境にできた轍に嵌まり込んでしまうのを避けるべく採用されたと考えられ、ローマのフォルム・ロヌムやポンペイ市街、アッピア街道などのように多角形の石材（Opus siliceum）



写真2 ペトラ・シーク



写真3 ポンペイ遺跡

を巧みに組み合わせることによって脱輪を回避するのは際立った違いをみせる^v (写真3)。

しかし、同じ大型の切石を用いても直交して並べる例がないわけではない。アレppoの西方40kmに1.2kmに亘って続くローマ街道の一部(バーボ・アル・ハワ)あるいはキルフスから程近い場所に架けられた2基の橋にそれを見ることができる。いずれの例も後2世紀の築造であり、玄武岩を使った大型の長方形切石には深い轍が残っている。橋の方には小型の長方形切石を敷き並べた修復部分もあるが、並べ方は大型石材と同様に直交型である。また、レバノンのティールに所在するアル・バアス遺跡^{vi}ではハドリアヌス門を挟んでローマ時代(後1世紀)の街路とビザンチン時代(後4世紀)の街路が保存されており、前者の石敷は縁石に対して大型の長方形石材を直交して並べられている。これに対して、後者では小型の長方形石材が

綾杉状に並べられているので、大型石材から小型石材への変化が認められるとともに、ここでは直交型から広い意味での斜交型に変化すると言ってもいい(写真4)。

確かに斜交型は、直交型に比べて馬車の安全な通行に適しているようにみえる。しかし、長距離に亘って一定の角度を維持することが難しい上に、縁石との間に隙間ができるため馬車の通行によって石自体が前後に動きやすいという難点もあるのではないだろうか。ガダラやゲラサの列柱道路は斜交型ではあるが、所々に直交の並びがみられるのは敷石の時期の違いによるものなのか、あるいはこのような斜交型の難点を補う目的があったためなのか、俄には決められない。

改めてアパメアの列柱道路を見てみることにしよう。幅7mの石敷ポルティコ上に立ち並ぶのは、10mの高さを誇る石灰岩製のコリント式円柱である。車道

幅21mの堂々たる南北路で、その中央部分は僅かに膨らんでいる。路面を覆っている石灰岩製の長方形大型切石は斜めに並べられ、そこには幾筋もの轍が残っている。馬車通行によるこうした石の摩滅に加えて、石と石との隙間に生えた草のために見過ごしがちだが、よく注意してみるとここでも何カ所かに直交の並びが認められる。

しかし、アパメアにおいて石敷の方法がはっきりと変化するのは列柱道路の南半で、列柱が通常の円柱から螺旋溝の装飾を施した珍しい円柱(Spiral fluted column)に変わる辺りを境としている。北半の列柱道路が再建直後から建設に着手されたのに対して、南半部に螺旋溝柱が建つのはそれから50年余り遅れ、後2世紀後半であったと推定されている^{vii}。敷石に使用されたのは同じく長方形の切石だが、北半で使われた石材に比べると、やや小ぶりで規格性がある。街路の中央に並べた石列の左右に直交する石敷が広がっており、都市北半の石敷と違って、ここにはほとんどといっていいほど轍が残っていない(写真5)。

中央列型とも言うべき、こうした石敷方法はイスラエルのガリラヤ地方に位置するローマ都市バイト・シャーンに類例がある^{viii}(写真6)。列柱は石灰岩製だが、敷石は玄武岩の小型切石を使ってお



写真4 アル・バアス遺跡



写真5 アパメア遺跡南半

り、中央の列石に向かって左右の敷石列が矢羽根状に並んでいる。この点はアル・バアスにみたピザンチン時代の石敷に類似している。そして、これらの石敷に共通しているのは、ほとんどと言っていいほど轍が残っていない点である。ペイト・シャーンはアパメアと同じく後2世紀に最盛期を迎えるが、363年の地震でほとんどの建物が崩壊してしまう。しかしその後、再建されて409年にはこの地方のメトロポリスになるのだが、銘文によると列柱道路はその時に再建されたものであるらしい。

そうだとすると、アパメアの都市南半の中央列型の石敷も、螺旋溝付き円柱の年代ではなくてピザンチン時代の所産である可能性もあるのではないか。教会やカテドラルなどの遺構が都市の南半に多いこともその可能性を示唆しているように思われる。ちなみに、このような中央列型は、ダマスカス旧市内のスークなどで今なお使われている街路にもその例がある。

街路と下水道

中世ヨーロッパ都市の街路は、排水機能という点においてもローマ都市に遠く及ばなかった。12世紀に初めて石敷となったパリの街路は、雨水や污水が道路の中央を流れるように路面中央がV字状に凹んでいたし、ロンドンでは17世紀になってもなお未舗装であったが、やはり道路の中央が凹んでいたと伝えられている^{ix}。当時の人々は污水だけでなくゴミも一緒に路上に捨てたので、それらをできるだけ建物から遠ざけたかったのだろう。

ローマ時代の街路はこれとは逆に、雨水を路面に溜めないように断面が緩やかな凸型に設計されている。加えて、ポンペイやゲラサの街路にみられる縁石下部の小孔は、建物から排出される污水を路上に流すためのものであるから、雨水だけでなく、污水もまた街路の両側を流れていたことになる。アパメアの列柱道路もまた、両側がやや低い。それは中央列型の石敷においても同様であり、ペイト・シャーンの列柱道路の場合は、いっそう中央部分の膨らみが顕著である。従って、中央列型街路は中世ヨーロッパのように道路中

央に水を集めて流すのが目的ではなく、そうした敷石方法の違いが路上排水の方法によって生じたとは考えられない。しかし、このことは敷石方法が排水システムと無関係であることを意味しない。というのは、排水は路上だけでなく、敷石の下に排水溝を設けた例がローマ世界に広く知られているからである。

ゲラサでは列柱道路に隣接した発掘区から、列柱道路下の主排水溝につながる排水溝が検出されている^x、アパメアでは北部列柱道路付近で、石敷の下層から排水溝とともに土製管を繋いだ給水施設とが発見されている^{xi}（写真7）。地下に埋設されたこうした排水溝には通常、石の蓋が被されているのだが、それでも土砂が流れ込んだり、動物が侵入したりして流れを止めてしまうといった事態のあることは容易に想像される。そのような場合は当然、石敷を剥がしてから排水



写真6 ペイト・シャーン遺跡



写真7 アパメア遺跡・地下排水溝

溝内の土砂や異物を除去することになる。仮に排水溝が街路の中央に埋設されていたとしよう。端から端まで連続して石を並べた街路では、直交型か斜交型かを問わず前後の石は短辺をずらしているため、剥がさねばならない敷石の数も自ずと多くなるし、また、戻す際に隙間も生じ易い。これに対し、アパメアのような中央列型だとその部分だけを剥がせばよいので、簡単で、かつ左右の石敷への影響が少ない。他方、排水溝が街路の脇に埋設されている場合には、直交型、斜交型を問わず、片方が縁石によって固定されている分、街路中央に埋設されている場合ほどの不都合は生じないだろう。

市内交通システムとしての街路

街路に石を敷く理由は、これまでに述べたように遺跡の立地や他の遺構との関係によっても多少異なるが、主たる理由は水はけの良さと馬車通行に対する適性である。しかし、石敷だからといって、必ずしも都市のなかを馬車で自由に通行できたわけではない。ポンペイでは、轍の観察から左側通行や一方通行の街路などが推察されるように^{xii}、他の都市においてもそうした通行に関わる規制があった可能性は少なくない。例えば、アパメアの列柱道路では敷石方法が連続型から中央列型に変わる地点で段差がつけられている。この段差のために馬車では直進できず、実際、中央列型の石敷に轍はほとんど残っていない。明らかに、ここには街路としての断絶がある。

同様の例はガダラの列柱道路にもあり、2カ所で西側が低くなる段差が観察された(写真8)。うち、東



写真8 ガダラ遺跡の段差

寄りの段差を観察すると、その境となっている横一列に並ぶ石には轍が残っていないだけでなく、摩滅もしていないから、馬車が段差を乗り越えて直進したとは考え難い。この石列を挟む前後の石敷は不揃いな大きさの切石を組み合わせて配置しており、段差を作った時に敷き直したもののようだ。どちらの石敷にも轍は残っているけれど、連続的でないため、おそらく別の箇所でも使われていた石を再利用したものである。

西方にある、もう1カ所の段差においても東側石敷の轍は西側石敷には続かないし、境の石列には轍も摩滅も認められない。ところが、これらの段差によって馬車の通行が阻まれているにもかかわらず、段差付近を除くと連続的な轍が確認される。つまり、或る時期にこれら2カ所の段差が設けられたことによって本来の列柱道路は大きな改変を受け、そこからは馬車の直進ができなくなったわけである。これによって市内通行が全面禁止となったのでなければ、迂回路が新たに設定されねばならない。

段差以外にも馬車の自由な往来が疑問視される箇所がある。例えば、ニンファエムの全面から南方に伸びて劇場に至るカルドである。轍が顕著で、かつ小規模な修復がしばしば行われている列柱道路とは対称的に、この街路にほとんど轍が認められないことも、初めから交通量に基だしい差があったとみるよりは、或る時点での交通システムの改変を想定したほうがよいと思われる。

ガダラよりも、いっそうはっきりと馬車の通行が阻害された例はキルフスにみることができる^{xiii}。この

都市は北と南に都市門を有し、カルドが主軸をなしている。ところが、その主要街路と北門との間にバシリカと教会が建てられ、街路を遮断しているのである。これらの建物の詳しい年代は不明だけれども、3世紀の半ばに2度のペルシア侵攻を許したのちにこの都市が復興する初期ビザンチン時代の所産である可能性が大きい。

このように、西アジアのローマ諸都市でみられる主要街路の改変は馬車の通行を阻害するものであり、ポンペイの街路のように馬車通行の安全性を図ることを目的とはしていない。ビザンチン時代になぜ、馬車の通行を阻むような措置がなされたの

だろうか。それまでの交通システムの転換、あるいは都市内の馬車交通そのものを放棄するようなことになったのだろうか。

ビザンチン時代の都市

話はエジプトにとぶが、筆者らが四半世紀を越えて発掘を継続しているアコリス遺跡は、一般にギリシア・ローマ都市として知られている。この都市が隆盛をみたのはローマの帝政期であるが、その後も都市は維持され、都市人口に限れば順調に発展しているかのように見える。4世紀になってキリスト教が普及すると神殿域にまで一般住居が侵入し、6～7世紀には都市壁を越えて居住域が広がっていくからである。しかし換言するなら、それは居住には不向きな傾斜地にまで住居を建てざるを得なくなった都市のスラム化に他ならない。神殿を中心としたローマ都市の崩壊のはじまりはキリスト教の普及ではあったが、この都市にとどめを刺したのは都市のキャパシティを越えてしまった人口の増大ではないか、と私たちは考えている^{xiii}。

西アジアの諸都市においても、ローマの衰退とキリスト教の隆盛に伴ってその性格を変えながら、しばらくは繁栄を維持したことは遺跡が物語っている。例えば、ガダラではビザンチン時代の建造物が少なくないだけでなく、西門がローマ帝政期の西門から300m以上も西に離れた場所に移り、市域を大幅に拡張しているからである。ゲラサも同様で、ローマ時代の建造物を残したままカテドラルや教会などが新しく加わっている。しかし、ここでも改変されたと思われる街路が観察される。

列柱道路に面したカテドラルは、ゲラサのなかで最大規模を誇るアルテミス神殿の南に隣接して3世紀半ばに造られた、東西100m以上×南北45mにもなる建造物である。この2つの建物の間は列柱道路に直交する石敷街路が通じているのだが、これは1～2m毎に段差を設けた有段の街路であり、馬車は通行できない。この街路の場合、ガダラとは違って段差の部分だけでなく、工事は街路全体に及ぶ。さらに、6世紀前半にはカテドラルの西方に街路を挟んで南北に連結した3つの教会が建てられるが、その入口はすべて街路とは反対方向に開いているのである。ローマ都市の骨格であり、交通システムの基盤であったはずの街路は、次第にその役割を失いつつあったといえるのではないだろうか。614年、ペルシアの侵攻を許す以前に、“給水施設に対してさえ、それを維持するための配慮は失われ、十分に機能しなかった”というI.ブラウニングの言葉は驚くにはあたらないのである^{xiv}。

地震やペルシアの襲撃によって崩壊したと言われるアパメアでも、それ以前に街路の改変が行われたことは先に述べたとおりだが、そのいっぽうで富裕層が都市から離脱する傾向もみえてくれる。アパメアから東方に約30km、緩やかな丘陵中腹の平坦地に広がるシルジッラというビザンチン時代の遺跡は、そのような富裕層の暮らしぶりを伝えている。遺跡の中心部分に建っている教会の創建年代は、372年の銘文資料が示すよりも古いのではないかとされているが、大規模な増築が行われるのは5～6世紀のことである。また、シリアで最も保存状態がよいと言われる浴場の一つは473年に造られた^{xv}。石灰岩の石切り場も残っていて、その近くには浮彫りのある石棺が放置されている。そして、東方には幾つかの住居が検出されていて、大きなものは16の部屋からなっている。都市から離れたところに、このように裕福なヴィラが出現するのも、それまでの都市の求心力が急速に失われつつあったことを意味しているように思われる。

J-Ch. Balty, *Guide d'Apamee* (Brussels, 1981), R. E. Keriahy, *Apamea History & Ruins* (Damascus), R. Burns *Monuments of Syria-An Historical Guide-* (London, New York, 1992)

岡 並木 『舗装と下水道の文化』(論創社, 1985) 8-12頁。

H. シュライパー (関 楠生訳) 『道の文化史』(岩波書房, 1962)

Petra National Trust, *The Petra Siq-Nabataean Hydrology Uncovered-* (Amman, 2003), pp. 33-53. 隊商都市・パルミラの列柱道路が石敷を欠いている理由にも、ラクダの利用があげられることが多い。

多角形石材の使用は、ベゾン・ラ・ロメヌ(フランス)、カルヌントウム(オーストリア)、イタリカ(スペイン)などヨーロッパのローマ都市の街路に類例がある。藤原 武 『ローマの道の物語』(原書房, 1985)。写真は堀 賀喜氏より提供頂いた。

A. K. Badawi, *Tyre*, (Beirut, 2004), p. 76

K. Butcher, *op. cit.*, p. 245

江添 誠氏のご好意で提供された写真による。

岡 並木、前掲書、156頁。

A. N. Barghouti, *op. cit.*

新井勇治氏のご好意で提供された写真による。

S. Tsujimura, *op. cit.*

R. Burns, *op. cit.*

H. Kawanishi, “ Summary ” in H.Kawanishi and S. Tsujimura (eds), *Akoris* (Kyoto, 1995), pp. 473-478

I. Browning, *Jerash and the Decapolis*, (Amman, 1982), p. 57

R. Burns, *op. cit.*

事務局だより

この10月から11月の2ヶ月間実施する第7次現地調査の一環であるガーナム・アル・アリ遺跡の全体層序確認発掘調査担当として活躍を大いに期待されていた木内智康氏が9月8日に、30歳という若さで、突如逝去されました。

本領域研究の研究のあらゆる場面で明るく、希望を持って活躍されていた同氏を思い出し、非常に悲しく、残念な気持ちでいっぱいです。

木内智康氏の逝去に心からの哀悼の意を捧げます。また、ご両親と兄上に心からお悔やみ申し上げます。

平成20年度の研究も半ばを過ぎました。本領域の研究をこれまで以上に有効に推進しましょう。

木内智康氏も研究の進行を見守ってくれていると思います。

(総括班)

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.11 2008年9月20日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1国土館大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

